

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

エクシリア 転生者のいる世界

【作者名】

暁の魔

【あらすじ】

テンプレのように転生してしまった主人公。エクシリアの世界で、新たな人生を歩んでいく。

転生最強系ですので、苦手な方や嫌いな方は見ないことをお勧めします。

そしてこれは、にじふぁんにて投稿していた同名の作品を再構築したもので、内容が変わっている箇所があります。

エクシリアはもちろん、他のテイルズ作品も一部ネタバレがあるのでご注意ください。

第一話 始まり

突然だが、俺は転生者だ。

頼むから痛い子だとか言わないでくれよ？ 二次創作のテンプレよろしく、気が付いたら死んじまってたんだよ。そしたらこうなった。

具体的に言えば、

- 1 大学から歩いて帰宅
 - 2 気が付いたら天気が曇りに
 - 3 そして落ちてくる閃光⚡雷
 - 4 俺に雷が直撃
 - 5 新しい体で覚醒
- という経緯だ。

しかしほんと、人生ってのはわからないものだよなあ。二次創作とかよく読んでたけど、転生する時は大体が神の失敗とかで間違っただけで、そのお詫びに……ってのが多い。

でも俺は違った。神とか、そんな超常な存在には会ってない。もちろん特典とかもない。

ちなみにこの世界は、『テイルズ オブ エクシリア』の世界だ。テイルズシリーズは俺の大好きなゲームの一つなんだけど、これは特に面白かった。だからこの世界に来て本当にうれしい。……とはいえ前世では戦いなどをしたことのない俺が、こんな殺伐とした世界に来るハメになり、泣きそうになったこともあったけどな。

続編が出るらしいが、それを買う前に死んでしまったのが心残りだ。

さて、転生等の話はとりあえずこれまでにしておこう。
俺は今、ラ・シュガルの首都であるイル・ファンにいる。物語はこ
こから始まるから、数年前からここに住んでるってわけ。

「ゼニス！ 急患だよ！」

「わかった、今行く」

あ、ゼニスってのは俺の名前ね？ んでもって俺を呼んだのが、

「今日はなんだか患者の数が多いな。そう思わないか？ ジュード」

「うん、僕もそう思う。 たった今診察したエデさんも同じで、精霊術の
失敗で怪我をする人が多いんだけど……みんな、^{ゲイト}霊力野も問題なかつ
たし」

主人公の一人、ジュード・マティスだ。

今の俺はイル・ファンのタリム医学校で働いている。回復の精霊術
が使えるというのと、ジュードがここにいるからという理由だ。主人
公とは仲良くなっていたいからな。

それで今、俺の上司であるハウス教授に頼まれて患者を診ているっ
てわけだ。

さて、それでは俺のちょっとした自己紹介でもしよう。

俺の名前は先ほども言ったように、ゼニスだ。実は本名じゃないけ
ど、長い間この名前を使ってるから、違和感がない。書類上は20歳
だけど、本当の年は俺も分からない。だって数えてないんだもの。

ちなみに独身。彼女はいたことあるけど、今はいない。

……寂しくなんてないぞこのヤロー。

親なんてものはいない。20年前にある事件が起こり、それ以降か

ら表に出始めるようになった。それから今までの20年間は、色々なことをした。そこはいずれ分かる時が来るので、今は秘密。というか言ったらネタバレになるので言わない。

原作はどうするのだった？　ほとんど覚えとらんわ！　でも確実にブレイクするだろうな。だって本来なら、俺はいない存在なんだし。

「ジュード先生、それとゼニス先生。今の患者さんで最後です」

そう言って診察室に入って来たのは、看護師であるプランだ。年齢は知らないけど、俺は呼び捨てにしている。

「そうか……丁度、急患が多いなど、ジュードと愚痴をこぼしていたところだよ。教授に、今日は予定の患者しか来ないからって言われてたのに」

「教授も、いい加減ですわね。急な患者が来ないわけがないのに。信用しちゃったお二人が悪いですわ」

「教授が精霊術で扱えるマナの量なら、一人診るのも十人も一緒なんですよ」

「^{ゲート}霊力野ばっかり発達しちゃって、普通の感覚じゃないんですよ」

俺らがそう言い合っていると、突然扉が開かれた。ジュードと同じ医学生だ。

「あ、あの！　ハウス先生見ませんでしたか？」

「そういえば、もう帰ってきていてもいいはずですけど……何かあつ

たんですか？」

ジュードが腕を組んで考え、質問してきた医学生に聞き返す。

「先生の研究が八才賞に選ばれたと連絡が！」

「ええっ!? 研究者最高の賞じゃないですか!」

八才賞。それかつての偉人である八才の名前を使った、ジュードの言う通り最高の賞だ。ジュードにとっては憧れの先生がそれに選ばれたというのだから、驚きも多いだろう。

「それで先方から早く連絡をしてほしいと。でも、先生つたら行き先を残してなくて」

「なら、僕が迎えに行ってきます。行き先は聞いてますから」

ジュードはそう言いながら、着替えるためにカーテンの奥へ行った。

……と思つたらもう出てきた。いくらなんでも早すぎだろ。

「いつも雑用みたいな事ばかりさせてすみません」

「いえ。それじゃ、行ってきますね。……あ、そうだ。ゼニスも暇でしょ? 一緒に行かない?」

「……………は?」

待て。何でそうなる。あそこは原作開始の場所だと言っても過言ではない。しかもあそこにはアイツがいるし、原作通りだとジュードはアイツと会う。つまり俺が付いて行ったら、俺も必然的にアイツに

会うわけだ。それはなんとしても避けなくては。

「いや、俺は待ってるよ。……行くのが面倒だ」

ちなみにこれ、半分本音である。あそこまで行くのはめんどい。

「面倒って、ゼニス教授の第一助手でしょ？ ゼニスが行かなくて他の誰が行くのさ」

そう。俺は何故かあの教授に気に入られ、第一助手となってしまうのだ。本来ならば、ジュードが第一助手候補だったのに……。

「お前でもいいだろ？ 第二助手候補のジュード君が行けばさ」

「あのね……とにかく行くから、速く着替えて！」

「ちょ、おい、押すな！」

後ろからグイグイと、さつきジュードが着替えた場所まで押された。見かけによらず、腕力が強い。そして渋々と着替える俺。ここにも俺の私服があるからな。

「これじゃ、どちらが年上か分かりませんわよ、ゼニス先生？ 早くお嫁さんを貰って、落ち着いた方が良くないじゃありません？」

プランが笑いながら言うてくるが、無視。俺にだって恋人候補、一応いるんだからな！ 告ってくるいい女、いるんだからな！ ……二人ほど。

でもあいつらは……いい女なんだが……恋人としては……はあ。

「はあ、着替えたぞ。んじゃ行くか」

「うん、行く」

プランたちに手を振って、診察室から出る。出る瞬間にプランが溜息を吐いてたけど、どうかしたのか？　なんか「あの人も報われない」とか言っているけど、あの人って誰のことだ？

そして数分後。俺たちはハウス教授が向かった、ラフォート研究所の目の前にいる。

入り口には兵士が二人おり、中に入れてはもらえなさそうだ。

案の定ジュードが入り口に近づくと、一人の兵士が前へ一歩進んだ。

「この時間はもう立ち入り禁止だよ」

「迎えで来たんですけど……タリム医学校のハウス教授です」

「ハウス……ハウス……。その先生なら、もう帰ったはずだ」

もう一人の兵士がそう言う。

するとジュードは、兵士が持っている物に指を差す。

「それ出所記録ですか？」

その言葉を肯定するかのように、兵士はジュードにそれを渡した。

ジュードはそこに書かれている教授の名前と、自分が持っている単位申請書に掛かれた教授のサインを見比べている。

「あれ……？」

小さな声で疑問を口にするが、俺は聞こえないふりをした。という

かさつきから俺ってば会話に入ってるねえ。

「納得してくれたかい？」

兵士にはさっきの言葉が聞こえていなかったようだ。そうでなければ、そんなことは聞かない。ジュードは「どつしてもダメですか？」と聞くが、許されるわけもない。規則を守るのが兵士の仕事だと言われ、諦めた。

「……ゼニス、どつしよつ？」

「どつしよつって言われてもな……あの人たちも仕事だからしょうがないだろ」

「そうなんだよね……」

会話をしながら歩いていると、突然周りの光が消えた。

「何だろつ……やっぱり精霊がおかしい？」

この街の明かりは精霊術を使った光だ。なのに消えたということ、は、ジュードの言う通り、精霊に何かおかしなことが起きているということだ。

そして、突風が吹いた。その突然の風は、ジュードが手に持っていた申請書を吹き飛ばしてしまい、上空に消えて行った。

それを呆けながら見ていると、湖の不思議な光景が視界に入った。青い魔法陣が水の上に浮かび、その上を綺麗な女性が歩いている。

……もう一人の主人公、ミラ。ミラ＝マクスウェルだ。

気が付けば、ジュードがいなくなっていた。あいつもこの光景を一

緒に見てたのに、どこに行ったのか……。

……あ、いた。ミラを追っかけてる。……んでもって水の大精霊ウンディーネに、水の球に閉じ込められやがった。大方、静かにしてほしいと言われたのに、何か質問でもしたのだろう。

ミラが研究所の中に侵入しようとしてるが、これって止めた方が良いのかねえ？

というか今のこの態勢、結構つらいんだけど。ミラたちがいるのが俺のいる場所の真下に位置する場所でさ、蝙蝠みたいにぶら下がってるわけよ。冗談抜きでキツイ。足の指を食い込ませてるんだけど、それはきつくない。ぶら下がっているということは逆さまになっているという事。だから頭に血が上って……この場合は下ってか？ とにかく、頭に血が集まって気持ち悪い。

あ、吐き気と戦ってたらジュードもいねえ。いつの間にか水の魔法陣も消えてるし。

ということはあいつも研究所の中に入ったな？ はあ、ジュードもこれで侵入者か。

さて、と。あいつらが出てくるまでに、武器の準備をしておくか。あいつらが研究所から出てきた時、それからが本当の始まりだ。間違いない。

……そう、テイルズ物語の始まりだ。

第二話 二つの出会い

ジュードとミラが研究所に侵入してしまってから、何分か経過した。大して経ってはいないと思う。

俺は自宅に戻り、愛用の武器を持ち出した。イル・ファンに来てからも鍛錬を欠かさず行い、町の外に出て魔物を狩ることも多々あったので、俺の腕は衰えていないはずだ。この武器は何年も使っているが、未だに刃毀れがない素晴らしいものだ。

どんな武器なのかというと、かなり大きな鎌。俗には大鎌と言われるものだ。

ついでに言えば、銘はシュヴァルツ。名の通り、漆黑という言葉が相応しい程の黒色だ。

その武器を持った俺は、急いで研究所の近くに戻る。するとタイミングよく、水の中から二つの人影が見えた。ジュードとミラだ。明らかに泳げないミラを、ジュードが担ぎながら泳いでいる。器用なやつだな……。

「ほらジュード、掴まれ」

「あ、ゼニス……ありがとう」

浮かんできたジュードに手を伸ばして助け出す。助けなくても大丈夫だったろうけど、一人抱えて水から出るのは大変だろう。

……ジュードのついでにミラも引き上げることにしよう。

「ほれ、そっちのあんたも」

「む、誰だか知らないがすまない。助かる」

「ミラ、泳げないんだね。大丈夫？」

「じほつ。ウンディーネのようにはいかないものだな」

「やっぱり、四大精霊の力が消えたんだ……ねえ、これからどうするの？ 精霊の力が無いと、あの装置はきつと壊せないよ」

「あいつらの力、か。ニ・アケリアに戻れば、あるいは……世話をかけたな、ジュード。ありがとう。君は家に帰るといい」

「あ……」

ジュードの質問には答えず、自己完結してから礼を言ってミラは立ち去った。

……俺、またしても会話に参加してない。

「……ジュード。四大精霊やら装置とかいろんな単語が出てきたが……一体何なんだ？」

その答えは知っているが、あえて知らないふりをする。

「あ、それは……」

ジュードは答えようかどうしようか迷ったみたいだが、事の顛末を教えてくれた。

教授が死んでしまったことや、それを見た直後に赤い服を着た銀髪の少女に殺されかけたこと。そしてミラがその少女から助けてくれたこと。等々だ。

しかし赤い服を着た銀髪の少女って、間違いなくアイツだよな？
行かなくてよかった。あいつとは敵対しているわけではないが、あれ
はある意味敵対関係よりも面倒な間柄だ。

話を聞き終わり、階段を上る。すると目の前に、兵士と対峙してい
るミラがいた。

「ミラー！」

「不用意だな、ジュード。無関係を装えばよいものを」

ミラが驚いてそう言うが、全くもってその通りだ。

「貴様らも仲間か……」

ほれ、兵士さんに仲間認定されちゃったよ。つか貴様らって、貴様
"ら"って、俺もかよ？ すんごいとばっちりを食ったんだけど。

そしてミラが兵士に向かって斬りつけるが、大振りすぎて簡単に避
けられる。

「ちょー……ミラ、剣使ったことないの？」

「うむ。今までは四大の力に頼って振っていたからな。あいつらの力
がないと、こつも違つとは……」

その言葉を聞き、ジュードが俯く。

「覚悟しろ……」

「もっ……」

どつやら覚悟は決まったらしく、ジュードは兵士に立ち向かっていく。

……『もつ！』と言いたいののはこっちだ。

兵士の装備品は槍と盾。対するジュードは拳で、ミラは不器用な剣。ジュードがもう少し成長すれば簡単に勝てるだろうが、少し苦戦している。鎧相手に拳はきついよなあ。

「はあ……恨みはないんだけど、悪いね。魔神剣！」

俺は三人の間に入っていき、持ってきていた大鎌を下から振って斬撃を放つ。

この技はテイルズシリーズの中で、最もメジャーだ。テイルズを一つでもやったことがあれば、誰でも知っていると思う。

……ん？ 武器が大鎌なのに、なんで『魔神剣』なのかって？

まあそこは余り気にしないでほしい。他作品でも武器が斧、槍、杖なのに魔神剣を使ってる人がいるんだから。『改』とか『烈』とか『超』とか『殺』とかが付属されるけど。

それはともかく、俺の攻撃は見事に命中し、兵士を鎧ごと切り裂いた。切り裂かれた兵士は倒れたので、死なない内に精霊術で回復させておく。

「はあ、はあ。何やってるんだろっつ、僕は……」

「重ね重ねすまない。ジュード、助かった。それに君も」

「どついたらしまして。あと俺の名前はゼニスだ。君、じゃない」

「そうか、私はミラ。ミラ＝マクスウェルだ」

「こんな簡単に名前を教えてもいいのだろうか。自分から精霊の主だと名乗るとは。まあ俺は知らない振りをするのだが。」

「精霊の主と同じ名前とは珍しいな」

「同じ名前というより、本人だからな」

折角気を遣ってやったのに……。

「それよりもミラ、とにかく急いでイル・ファンを離れた方が良く思
ひます」

「そうしよう。ではな」

「素っ気なくミラは出口に行こうとするが、ジュードがそこに注意す
る。」

「街の入り口は、警備員がチェックしていることが多いんだ。海停の
方が安全だと思っよ」

「む、そうか」

ミラは返事をするも、周囲を見てから首を傾げる。

「……海停、知らないんだね。一っち」

「出た、ジュードのお節介。これはジュードの良い所んだけど、こ
れが原因で危険へ足を突っ込むことになるんだよね……これから。」

「すまない、世話になる」

「ううん。助けてもらったお礼。海停まで送るよ。海停はここから街のちょうど反対側なんだ。まず中央広場へ向かおう」

二人はそう言って歩き出すのだが、またしても俺は蚊帳の外。泣いてもいいすかね？ 別に泣かないけどさ。取り敢えず二人についていくことにした。

「そう言えばゼニス、何でそんなものを持つてるの？ さっきまで持ってなかったのに」

ジュードが言った「そんなもの」とは、俺の愛鎌・シユヴァルツのことだ。

「お前がミラ嬢を追って行ったのは見えててな。なぐんか嫌な予感があったから、家に帰って持ってきたんだ。その予感は見事的中したみたいだけどな」

……俺のミラへの呼び方は気にするな。単なる気分だ。

「ふむ。だがそのおかげで私とジュードは助かったのだ。改めて礼を言おう、ゼニス」

「僕からもありがとう、ゼニス」

「どづいたしまして。にしても精霊の主ねえ。そうは見えないけど、どづせ本当なんだろうな……」

「おや、君は信じるのか？ ジュードは最初、疑っていたのだがな」

「ジュードから大体の話は聞いた。その時に四大精霊を使役してたつて聞いたし、さつきクシャミして、『イフリートがいれば』って言うってたからな。服を乾かすだけで火の大精霊を、なんて言ってるのを聞いたし、俺が助けた時もウンディーネがどこのこつものって言うってただろ？ ただの『大精霊がいれば』という願望にも聞こえるけど、それに加えてジュードの話の聞けば信じるしかないだろ」

それに、俺の場合は知識があるしな。ほとんど忘れたけど、重要な部分はさすがに忘れていない。

それからもしばらく走り、海停へと到着した。状況からして、船もあと少して出港するようだ。そして海停を歩いて船へ行こうとした時、突然怒鳴られた。

「そこの3人、待て！」

「え……何!？」

またしても兵士だ。つーか何で俺も？ 俺の横で驚いているジュードは、まだ分かる。研究所に侵入してしまったんだから。ミラもそれに同じ。でも俺は何で？ さっきの兵士を倒したから？

「先生？ タリム医学校のジュード先生？ それにゼニス先生……」

「あなた……エデさん？ 何がどうなってるんですか？」

向かってきた兵士の一人は、今日俺たちが診察したエデさんだった。唯一ヘルムを被ってないのですぐにわかった。

それと遠回しに何こつちを見てんだ野次馬共。見世物じゃねえぞ。

「先生が要逮捕者だなんて……ジュード・マティス、逮捕状が出ている。そつちの女もだ。軍特法により応戦許可も出ている。抵抗しな

いでほしい。ゼニス先生、貴方は一緒にいるようですが、逮捕対象者ではありません。ですが一応、重要参考人としてこちらに来てはくれませんか？」

俺は違う？ あ、研究所に入ってないからか？ でも行くのは面倒だなあ。

「ま、待ってください！ た、確かに迷惑をかけるようなことはしたけど、それだけで重罪だなんて……！」

兵士はジュードのその言葉には耳を貸さず、武器を構えてくる。俺は無罪らしい。が、もし俺の立場がバレれば重罪なんだけどな。だから兵士の皆さんとは話したくない。

俺の立場って何なのかって？ 今は秘密。いずれ分かると思う。

「問答無用というところのようだ」

「エドさんっ……」

「悪いが。それが俺の仕事だ」

仕事と私事はしっかりと分別する、ということか。

俺には分からないな……俺、本当の仕事をサボってイル・ファンで医者していたもの。本当の仕事が何かって？ これも秘密。

……秘密だらけですみません。

「ジュード、私は捕まるわけにはいかない。すまないが抵抗するぞ」

「……抵抗意思を確認。応戦しろ！」

エドさんの言葉で、彼の部下がファイアボールを放った。ミラと

ジュードはそれを避け、その後ろにいた俺も避ける。その光景を目にして、一般市民はほとんど逃げ去って行った。

「というかおい、俺は対象外だろ。もう少し気を付けろよ。」

「さらばだジュードとゼニス。本当に迷惑をかけた」

船の汽笛が聞こえ、ミラがそちらへ走っていく。船が出港して行くのが見えたらしい。もう行ってしまった。

「さあ、先生。抵抗したら、その分罪は重くなりますよ」

「僕は、僕はただ……」

抵抗する意思なしと見たのか、ジュードに詰め寄る兵士たち。だがあと少しで捕まるというところで、助けようと俺が動き……始めようとしたのだが、横から乱入者が現れた。

その乱入者は兵士を殴り倒していき、言葉を放った。

「軍はお硬いねえ。女と子どもとプラス1相手に大人げないったら」

「……ん？ おい、プラス1ってまさか俺のことか？」

「あ、あなたは……？」

「おっと。話はあとな。連れの美人が行っちゃったよ？」

「でも、僕は……！」

「軍に逮捕状が出て、特法まで適用されている。つまりお前はランク犯罪人扱いだ。このままだと極刑だぞ、ジュード」

「そっちの兄ちゃんの言っ通りだ」

「そんなー！」

今日は驚いてばっかだなジュード君。というかこれ以上の厄日はそうそうないだろう。

というか俺も今日は厄日か？ 今を見て周りの兵士が集まって来たし。

一緒に行かないと街を出る機会を逃すので、俺は二人と共に船に向かう。この街でやり過ごしたことなくって……一つを残してないからな！

先ほど乱入してきた男がジュードの腰を掴み、船に向かって勢いよく跳躍。あの脚力は素直に凄いと思う。俺も足に自信はあるが、跳躍力は特に鍛えてないのでそんなにない。今後から訓練するでしょう。それでどうやって船に乗り込むのかが……よし、こつするか。

とある方法で俺が船に着くと、さっきの乱入者が自己紹介をしていた。やはりというか、彼の名前はアルヴィンというらしい。

「こつちはミラ。それでこつちがゼニス」

「今紹介されたゼニスだ。よろしく、アルヴィン」

「よろしくな。そして……」

アルヴィンはジュードの肩に手を乗せ、優しくこつち言った。

「がんばったな」

俯きながらも、ジュードは頷く。

ただの一般人がこんな目に合ったのだから、本当に頑張ったと俺も思う。

そしてその後の俺たちを待っていたのが、船長による長い尋問だった。ま、犯罪者かもしれない輩を、自分の船に乗せたくないよな。特にミラは身分を示す物がないので、かなり時間がかかった。アルヴィンは愚痴を言うが、俺はその辺納得している。

「ア・ジュール行きだなんて……外国だよ……」

そんな中、一人落ち込んでいる人物がいる。ジュードだ。

「見るよ。イル・ファンの靈勢が終わるぞ」

アルヴィンそう言った直後、夜のようなだった空は瞬く間に青空へ変わった。

これはイル・ファン周囲にある靈勢が夜域という特殊な靈勢であり、その領域を出たから青空になった、という理屈だ。

「にしても、医学生と医者だったとはね。ちょっと驚いたよ」

俺が医者だったら驚くのか？ それ失礼じゃね？

「ねえ、聞いていい？ どうして助けてくれたの？ あの状況じゃ、普通助けないよ」

「金になるから」

ジュードの問いに、アルヴィンは即答する。「ここまで早い返答も珍しい。」

「私たちを助けることが、なぜそうなるのだ？」

「あんたらみたいなのが軍に追われてるってことは、相当やばい境遇だ。そいつを助けたとなりゃ、金をせびれるだろ？」

「でも、僕、お金ほとんど持ってないよ」

「生憎、私もだ」

「そして俺もそうだ。九割方俺ん家にある」

俺は犯罪者扱いされてないから、押収されることもないだろうけど。でもまあ、それはイル・ファンで稼いだ金だ。俺の他の家には、もつとあるけどな。100万以上。

いや、そもそも助けられる必要が無かった俺は払う義務もないか。

「マジか……なら値打ちもんでもありゃ、それで引き受けるぜ？」

「ないよ。あんな状況だったんだ」

「高く取引されそうなものなどないだろうな」

「俺はこの武器くらいだが……これは駄目だ。とても手放せない」

「これ以上に大切な物はないからな。命とかは別として。」

「ねえ、アルヴィンって何してる人？ 軍人みたいだけど……ちょっと違う感じだしね」

「ジュード。今の取引の仕方からして、アルヴィンはおそらく傭兵だ」

「お、ゼニス正解。金は頂くが、人助けをするすばらしい仕事」

「ふむ。それは感心なことだ」

ミラは感心するが……そう素晴らしいものじゃないと思っけどな。金次第で敵にも仲間にもなるわけだし。ああ、別に傭兵やアルヴィンを否定してるわけじゃないからな？

「にしても、ゼニスは俺が何をしているのか、よくわかったな」

「そりゃ、俺も医者の前は傭兵だったからな」

「えっ!? そうなの!？」

「ああ。傭兵の時に得た医療知識を使って、医者になったんだ。場合によっちゃ、こっちの方が儲かるし。だからこんな武器も持つてるんだよ。当時使ってたからな」

「どつりでな……しかし、しゃあないか。ア・ジュールで仕事でも探すか」

「すまなかつたな」

金がないことミラが謝り、しばらく沈黙が続く。そこで俺はもう喋ることはない判断し、勝手に物置部屋を借りて寝ることにした。最近は忙しくてあまり寝れなかったから、船から降りるまで寝ようと思っただからだ。

船を降りる少し前のチャット

出演者：ゼニス・ジュード・ミラ・アルヴィン

ジ「そういえばさ、ゼニスはどうやって乗船したの？」

ミ「ふむ、それは私も気になっていた。ジュードとアルヴィンは飛び乗ったのを見たが、ゼニスは気が付いたら既にいたからな」

ゼ「俺はアルヴィンほどジャンプには自信がないんでね、違う方法を使ったんだよ」

ア「違う方法？　どんなだ？」

ゼ「なに、ただ水上を走っただけだ」

ア「……すまん。もう一度言ってくれるか？　どこをどうしたって？」

ゼ「水上を、海の上を走って船に追いついた。ただそれだけだ。海からジャンプした方が近かったからな。だがこれからはこういう時間のために跳躍力も上げなくては……ちょっと練習してくる。時間になったら教えてくれ」

〜ゼニス退場〜

ア「……なあジュード君？　彼、本当に人間？」

ジ「た、たぶん」

「ミ」どつちやら私は人間を見誤っていたようだ。まさかそのようなことが可能とは……」

「ジ」いや、普通はできないから、そんなの

第三話 魔物との初戦闘

船が海停に到着し、陸に降りたつ。俺は海の潮臭さがあまり好きではないので、船から降りられて正直嬉しい。背伸びをしていると、近くでジュードとアルヴィンが話を始めた。ここは外国のア・ジュールのだが、ラ・シユガルとそんなに変わらないことを話題にしている。

確かにそれを聞くと、ここらはそんなに変わらないことに気付く。

そんなジュードだが、突然地図を見てくると言って地図まで走って行った。

傍から見てもわかるが、明らかに無理をしている。

「空元氣、かねえ」

「気持ち切り替えたのか。見た目ほど幼くないのだな」

「おたくが巻き込んだんだろ？ 随分と他人事だな」

「確かに世話になった。だが、あれは本人の意思だぞ？ 私は、再三帰れと言ったのに」

「は〜ん。それでおたくに当たるわけにもいかないから、あの空元氣ってか。どっちにしてもオトナなこと」

そこでミラはジュードのしている地図の所へ行き、話し相手のいなくなったアルヴィンは後ろにいた俺に話しかけてくる。

「で、ゼニスは何であの2人に付いてるんだ？ 話を聞く限り、おたくは完全に無関係なんだから？」

「全くの無関係って訳でもない、兵士を一人倒しちゃったし。まあ何より、俺は大人であいつは子供。子供のお守り、みたいな感じだ。それに人生の新しい起点と考えれば、悪い事だけでもない」

実際は原作を知ってて自分から介入したんだから、ちょっと違う。まあ、今言ったのも全部本当に思ってることだけだ。それに、どちらにしろ俺は……いや、今はいいか。

「へえ。責任感がある上に、ポジティブな性格してんのな」

「あはは、責任感は微妙だが、ポジティブなのは自覚してるよ」

会話しながら地図を見ている二人に近づくと、ミラの目指している場所はここから北だということが分かった。地図を見ていたミラの呟きが聞こえたからな。

「ふ〜ん。それで？ すぐに発つのか？」

「いや……アルヴィン、それにゼニスもだが、傭兵というからには、戦いに自信はあるのだから？」

「ああ。そりゃあな」

「傭兵云々は過去形だが右に同じ」

ミラの質問にアルヴィンが肯定し、俺もそれに続く。

「私に剣の手ほどきをしてもらえないか？ 今の私は、四大の力を持

たない。剣を扱えないと、この先の道は困難だ」

「四大……？　なんか、よくわかんねえけどさ。正直、俺を雇って欲しいとこだよ。でも金ないんじゃないかな……」

「無理だろうか？　ゼニスは？」

「俺は別に構わないが……いや、そうだな。お前ら、アルヴィンを雇え」

俺のこの言葉に、頭上にハテナマークを浮かばせる三人。でもま、金がないのに傭兵を雇えとか言えば、そうなるよな。

「人々の中には、自分が出来ないことを依頼する人がいる。その依頼を引き受ければ、内容によっては剣の訓練にもなる。そしてその報酬をアルヴィンに払えば、利害が一致するだろう？」

「なるほど……だが、ゼニスはそれでいいのか？」

「ああ。最近ストレスが溜まってたから、発散させようと思ってね。俺は勝手についていくだけだから、報酬は不要だ。アルヴィンもそれでいいだろう？」

「むしろ俺にはいいこと尽くしだから、大歓迎だ」

これからの方針はこれで決まった。ま、原作と同じ結果だけどな。だが、もう一つ注意すべき点がある。それは、

「その前にアルヴィン。ミラ嬢に剣の基本だけでも教えてあげてくれないか？　一度だけ剣を使っているのを見たが、あれではミラ嬢が死ぬ。教えている間に、俺が依頼を探しておくからさ」

「そうなのかな？ まあ基本だけなら……わかった」

これも何とか解決。あのままでは、報酬を払う払わない以前の問題になる。万が一の時には俺かアルヴィン、ジュードがミラを守らなければならないのだが、誰もいない時に狙われたら簡単に死ぬる。

その後五分くらいで、依頼をしようとしている女性を俺は発見した。その人の依頼内容はこの海停の先にある間道、イラート間道にある湖にいる魔物退治だった。湖の水は大切な資源なのだが、その魔物が棲み付いたせいで問題になったらしい。

報酬は現金で払うと言っていたので、早速アルヴィンたちの所へ向かった。タイミングが良かったらしく、ちょうど基本を教え終えたようだ。

「お、ゼニスか。どうだった？」

「バッチリ。この先にあるイラート間道の魔物退治だ。この近辺にはいないはずの魔物なんだと。場所は西にある湖付近だ」

依頼内容を伝え、俺たちはすぐさまその間道へ向かう。

そして間道に入ると、目の前には複数の魔物がいた。ミラの剣の訓練にはもってこいだと思い、話しかけようとする。するとそこで、俺を含めた全員のリアルオーブが光る。

「む、リアルオーブが光った？」

「なんだ、ジュードが持っているのは知ってたけど、ミラ嬢も持ってたのか。……まあ、アルヴィンは俺と同じ傭兵だから、持ってもおかしくないけどな」

「お前らもリアループを持ってたのか？ んじゃ、共鳴戦闘、いつてみるか！」

ジュードとミラは共鳴の事を知らないようだ。今の言葉を聞いて、首を傾げていたからそうだとわかる。

アルヴィンが軽くリアループの説明を、つまりリアループを持つ者同士で、互いに感知できることを教えた。本当に軽くしか説明してないので、二人はまだよくわかってないらしい。

それにしても共鳴戦闘か……。そういえば久しく使ってなかったな……。最後に使ったのは確か5、6年前だったか？ でも今は思い出に浸かるより、分かってない二人に教えるのが先だな。

「習つより慣れる、戦って覚えるのが一番だ。ちよつと魔物もきたぞ」

「そついうことだ。リアループに意識を集中しろ！」

言葉を言い終わると同時に、戦闘が始まった。

こいつらはここら一带にいる魔物で、かなり弱い分類に入る。戦士として、並の力があれば勝てるだろう。

「魔神拳！」

ジュードの技が炸裂する。ミラとリンクを繋げていたらしく、共鳴術技が発動した。

「行くよ、ミラ！」

「了解した！」

「絶風刃！」

魔神拳とウィンドカッターによる共鳴術技^{リンクアーツ}、絶風刃。エックス状の風の刃は直線に進み、魔物を切り裂いていった。

「やるじゃねーの」

「へえ、初めてなのに凄いじゃん」

アルヴィンと俺は、成功に驚くというか感心する。失敗することがない訳じゃないので、初っ端から共鳴術技^{リンクアーツ}を成功させたのを見て、そう思った。

「よし、じゃあ俺も続くぞ！」

そう言って、俺はわざわざ数匹の魔物が集中している場所へ行く。

「真空破斬！」

技名を言ったのと同時に、鎌を横に大きく薙ぎ払う。真空の刃が周囲の空気を真っ二つに切断し、複数いる魔物も、その全てが同じ末路を遂げる。

この技は単純だが、それ故に強く放つには高度な技術が必要になる。

出だしも速いので、俺の標的になった魔物は防ぐ間もなく倒れた。それに例え防がれたとしても、余程上手な防ぎ方でなければ意味が無い。

「ゼニス、君もやるな！」

「ミラ嬢に褒められるとは、光栄だね」

「でも、本当に凄いよー!」

「ジュード……野郎に褒められても嬉しくねえな」

「ええ!?!」

そんな談笑を戦闘中にすることが出来るくらい、今回は余裕だった。むしろこんな雑魚には勿体ない気がする。もう遅いけど。

それからも連携し、そこにいた魔物は全て倒しつくした。俺、今回は一回もリンク使ってないけどね。

「どうだった？ 共鳴戦闘ってのは?」

「うむ、気に入った」

「うん、一人じゃないって嬉しいね」

「ああ、いいこと言うねジュード君」

初めての共鳴戦闘の説明と実践を終了し、俺たちは目的地である湖へ向かう。途中でも魔物はわんさか出現したが、先程のと同レベルだったので、俺たちの敵ではなかった。

「そう言えばゼニス、おたくは何で傭兵から医者になったわけ？ 医者の方が金になるとか言ってたけど、切欠とかなかったのか？ 医者以外でも金が入る仕事はあるだろ。例えば軍人とかなら、かなりの地位につけると思うんだが、そこんとこどうよ」

目的地まであと半分だろうという所で、唐突にアルヴィンが聞いてき

た。

俺が医者になったのは主人公ズに会うためというのが目的だったが、実はもう一つ理由がある。あいつらに会うためだと言うなら、それこそ軍人でも会えたのだろうから。

「んー、秘密にしているわけでもないし、いつか。かなり前の事だけど、俺の命を救ってくれた人がいて、その人が医者だった。それだけだよ」

「へー、そんなことがあったんだ」

俺の言葉にジュードが驚いたような顔をする。それに頷いて、俺は言葉を続けた。

「それに、傭兵だった頃は他者の命を取る仕事もしてたからな。今度は命を拾う仕事してみよう。そんな風に思ったのも、理由の一つだ」

「なるほどね。しかしよ、戦ってるの見りゃ分かるが、お前って相当強えよな？ それでも死にかけるようなことがあったのか？」

「死にかけてた訳じゃないんだが、まあ、ちょっと昔な」

俺が言葉を濁したことに気付いたのか、それとも興味を無くしたのかは分からないが、アルヴィンはそれ以上聞いてこなかった。どちらにせよ俺も話す気はなかったのだが、ここでアルヴィンが話題を変えてきた。

「そう言えばよ、ゼニスの武器って俺のと同じくらいデカイよな」

「確かにな。まあアルヴィンの持つてる剣には負けるけど」

アルヴィンはそれに加えて銃を持っているが、俺は素手。違いがそれくらいしかない。

俺もアルヴィンも、大きな武器を片手で使っているから。

「だがゼニスの方が、足が速い。ジュードといい勝負だろう」

「そんな大きな物を持ってて、それでも僕と同じスピードって、ちょっと自信無くすんだけど。いやでも海の上を走ったみたいだし、無手なら僕より遥かに速いかも……」

でもアルヴィンのは剣で、俺のは鎌。金属を使ってる割合がかなり違う。あっちの方が、かなり重いと思う。それに……

「安心しろ、ジュード。それでも集中回避ってやつは、俺には出来ん」
俺がこの鎌すら持っていない状態なら、確かにジュードより速いだろう。だけどアレは、とても真似できない。

集中することによって敵の攻撃を見切って瞬時に後ろに回るとか、それも十分な神業だと思うぞ。しかも完璧に気配を隠して隙だらけの所に反撃するとか、ナニその護身術。もはや護身の域を超えてるっつもの。

その話題も一段落ついてしばらく歩き続けると、湖が見える場所まで到着した。依頼で言われていた通り、この辺りにはいないはずの魔物がある。

「さて、あれを倒せば依頼達成なんだが……これはお前らがアルヴィンに報酬を払うためだからな、お前らが戦え。実戦が一番の訓練だし、危なくなったら助けてやるから」

「確かにその通りだな。行くぞ、ジュード」

「うん、わかった」

二人は意気揚々として魔物に向かっていく。アルヴィンもそれに続く。

そして俺はその後方で見守っている……わけでもなく、近くの岩場に腰掛けているだけ。何かあってもアルヴィンがいれば平気だろ。

「まあ正直、俺が戦うのがめんどくなっただけだが」

ストレス発散は一応出来たし、戦う理由もないしな。

「それが本音なの!？」

「ん？ おお、もう終わったのか」

「終わったよ……ところで大丈夫、ミミラ？」

「ああ、ゼニスの言う通り、実戦が一番の訓練だな」

ジュードの言葉に、大丈夫だと返すミミラ。二人とも大した怪我は負ってないし、心配はしなくてもいいな、こりゃ。

「んじゃ、イラート海停にもどって報告しようぜ。ゼニスが受けたんだから、報告よろしくな」

「了解だ」

「……依頼を受けた人が最後の最後に報告するだけって、いいのかな

「？」

「いいんだよ、別にそれだけでも。これはミラ嬢の訓練なんだから。そして報酬はアルヴィン行き。俺が貰う訳でもないし」

ジュードは微妙に納得していなさそうだ。こつこついう所は嫌いじゃないんだが、生真面目なんだよな……あ、この場合は俺がサボったからか？ それならごめんなさい。

さっきの魔物でサボった罰として、イラート海停に戻るまでの魔物は全部俺が戦う羽目になった。……ジュードめ、年上の俺になんて仕打ちだ。敬意を払えよ、敬意を。とはいえザコなので、簡単に勝てるが。

さて、速く戻って以来達成の報告をしよう。腹が減ったし、何より眠い。船の中で散々寝たはずなのになあ。

第四話 休息と出発

俺たちは依頼を成し終え、その旨を依頼主に報告した。

前に言った通り、報酬はちゃんと現金で支払われた。決して安い金ではない。少なくとも、これだけあれば宿に泊まるくらいは楽に支払える。

なので休もうと宿屋に向かった、その時だった。ミラが突然倒れたのだ。ジュードは慌てながら、しかし冷静にミラを診るという器用なことをしていた。

「熱はない……どんな感じ？」

「……力が入らない」

倒れながらもいつもの調子でそうは言う。そして言い終わったと同時に、腹が鳴る音が聞こえた。もちろんミラの腹から。

それを聞いたジュードが目を細め、ちゃんとご飯を食べているかを聞く。それに返って来た答えは、食べたことはないというものだ。

ミラは、今までは食事ではなく、精霊の力で栄養を取っていたらしい。人間からしてみれば、それはとても羨ましいものだ。被災しても、餓死する心配がないということでもあるのだから。だが食事の楽しさを全く知らなかったというのは、かなりもったいない。

「そうか、これが空腹というものか」

「突然ぶっ倒れたから驚いたぞ。まさか原因が空腹とはな」

俺はミラにそう言うが、仕方ない気もする。何せ今まで必要なかったのだから、空腹感が分からないのかもしれない。

そして宿屋へ向かう途中、アルヴィンが大きな溜息を吐いた。

「はぁ……………」

「随分と大きな溜息だね」

「おたくら、実はア・ジュールのスパイだったりしねえの？」

「な、そんなわけないでしょ。ね、ゼニス？」

「ウ、ウン。ソウダネ、ソクナワケガナイジャナイカ」

あ、ヤバ。片言になっちまった。怪しんで……………」

「軍が特法使って追うなんて、ア・ジュールの軍事スパイくらいだと思っただけだな」

……………ないようだ。よかったよかった。

まあどちらにせよ俺はスパイじゃねえしな。

「誤解だよー」

「何故それ程そこにこだわるのだ？ お前……………まさかラ・シュガルの……………」

ミラはそこに訝しむが、アルヴィンは首を横に振った。

「違っつて。ただ働きでも、おたくらがア・ジュールの関係者なら、軍

にコネつけてもらってオイシイ仕事にありつけるかもって思ったんだよ」

ふうん、なんか嘘っぽいけど……気にしないでおこう。

「期待にそえなくてすまない。謝礼は必ず払う。だから、もうしばらく待って欲しい」

「わかったよ。そのかわり、待ち時間の料金も請求させてもらうわ」

今まで歩みを止めていたが、会話が終わったことでまた歩き出した。皆はさつきまでと何ら変わりなく歩いているが、俺は違った。心臓がバクバクである。いつかはバレルのを覚悟しているが、今はその時ではない。

そして宿屋に入り、アルヴィンが宿屋のおっちゃんに話しかける。

「いらっしやい」

「四人だ。とりあえず、すぐに食事だけでも貰っていいかい？」

「すまないね。料理人がまだ来てないんだよ。……おいおい」

おっちゃんが驚いた目で俺の後ろを見たので、俺も後ろに目を向ける。すると、ミラが今にも倒れそうになっていた。それを見たジュードが溜息を吐く。

「だったら、厨房を使わせてもらってもいいですか？」

「お連れさん、ぶっ倒れそうだしな。好きにしてもらっていいよ」

ぶっ倒れそうっていうか、すでにぶっ倒れたけどな、このお嬢。それにしても何ていい人なんだ、このおっちゃん。俺らがいくら客とはいえ、見知らぬ人のために自分の宿の厨房を貸せるとは。

「あ、ジュード。俺も手伝っぞ」

厨房に向かったジュードを追いかけ、料理の手伝いをする。料理人は来ていないとのことだったが、食材はかなりあったので作るのには困らなかった。

作り終わり、テーブルに座って待っているミラとアルヴィンのところへ行き、四人分の料理を置いて食べ始めた。

「いただきます、っと」

手と手を合わせてからの、この言葉。

かなりの時間が経っているのに相変わらず日本の習慣が残っている俺は、今でもこれを行う癖がある。以前ジュードに指摘されるまで気付かなかった。

やはりというかなんというか、それを知っているジュード以外の二人は首を傾げていた。

「む？ その“いただきます”とやらは、どついう意味だ？」

「あゝ、気にすんな。何かを食べる前に俺が言う癖だから」

「それ、前に僕が聞いた時も言ったよね？ どついう意味なのか教えてよ」

「そこまで気にすることか？ まあいいけどさ。今の言葉は色々な意味があるんだが、簡単に言えば食材に対して、“あなたの命をいただ

いて、私は今日も生きていきます」という感謝の意をあらわしているんだ。食材にも命があるという考えがなければ意味が分からないだろうが、肉だって元々は命ある生物だった。その命をもらいますという意思の表れだな」

説明が長くなってしまったが、実際にもこんな所だろう。間違っ
てはいないはずだ。

「なるほど……それは確かにそうだ。ゼニスと一緒にいると、色々なことを知ることができるな。勉強になる」

俺のいた世界とこの世界はかなり違うからな。元々は宗教とかでこの言葉がつくられた訳だし。

「ふむ、それでは私も言つとしよう。いただきます」

「……いただきます」

ミラが俺の真似をして、ジュードとアルヴィンが続く。そしてミラが、誰よりも早く食いついた。

「お、うまい」

「それだ」

アルヴィンが俺とジュードの料理を称賛すると、ミラが顔を上げた。今までずっとがっついていたのに。

「食事というのは、なかなか楽しい。人は、もっとこういうものを大切にすればいいのだ。先ほどのゼニスの言葉も同じだ」

微笑を浮かべてそう言うミラは、慈愛に満ちていた。その顔を見れば分かるが、本当に人間が好きなのだろう。

しばらくすると、いつの間にかミラは寝てしまっていた。ちゃっかり食い終わっているところが笑える。

「もしかして寝るのも初めてなのかな」

「……………さっきの飯食べてなかったってのもそうだが……………何者？　この娘」

「マクスウェルなんだって。アルヴィン、知ってる？」

「……………マクスウェルだって？」

驚きながら、しかし静かにアルヴィンが言う。

「俺も聞いた。自分でマクスウェルだとか言っていたし、ジュードの話聞けば、四大精霊を使役していたらしいからな」

「な、四つの元素を操る、最強の精霊を!? ……精霊の主、四元素の使い手、最古の精霊、色々な呼び名があるが……………この娘が、精霊マクスウェル？　嘘だろ……………」

「そんなにすごい精霊なの？」

「ああ。信じられないよ。ガキの頃から枕元で、マクスウェルの話を聞いて育ったんだからな」

「そんなミラが壊そうとしている物って、何なんだろう……………」

「壊そうとしている？　何を？」

「あ、うん。確か黒匣^{ジツ}とか言ってたかな。研究所にあった装置」

「……………ふうん」

「ミラにちゃんと聞いてみよつかな……………」

「はあ、ジュードはまた……………。ちょっと注意はしておくか。」

「興味本位で首つっこんで、ア・ジュールでも追われないように気を付けるよ?」

「……………」

「ゼニスの言う通りだが……………しっかりと考えるんだな」

「うん、ありがとう。ゼニスにアルヴィン」

今夜の会話はここで終わり、俺たちはそれぞれ部屋へ向かった。

眠っていたミラはどうやって部屋に行ったのかわかって? 知らん。

できれば俺も知りたい。ジュードが運んだんじゃね?

……………あの豊満ボディを運ぶ、だと? ……俺がやっつけばよかった

!!!

そして次の日。

「おはよう、三人とも」

「おはよう。早速だがジュード、これからのことで話がある」

「うん……」

朝の挨拶が始まり、一秒程で終わった。何とも悲しい朝だ。

「私はニ・アケリアへ帰ろうと思っている」

「ニ・アケリア？ ミラの住んでいるところ？」

「正確には祀られている。そこに帰れば、四大を再召喚できるかもしれない」

祀られているとは……さすがは精霊の主、と言った所か？ いい身分だな。

「マジでマクスウェルなのか……」

アルヴィンがそう呟いていた。

……ちょっと悪戯してやるついで。

「彼女を……せば、エ……ス……か？」

「っ!？」

本当に悲しそうに、わざと聞こえないように独り言を呟く。だが少しは聞こえたようで、アルヴィンが俺の方を向いて目を見開いた。

「ん？ アルヴィン、どうかしたのか？」

「……いや、何でもねえ」

おやおや。どうしたのかねえ、アルヴィン君は。
しかしこれよりも北上すると、俺……仕事サボってる状態だからあ
いつらに連れ戻される気がするんだが、どうしよう。いやでも会わな
ければ無問題だよな？

……おっと、思考していたら話がすんでいたらしい。ジュードは
ミラについていき、アルヴィンも一緒に行くそうだ。

「ゼニスはどうする？ 君は元々無関係だったから、君の判断に全て
任せるが」

「……色々考えたが、今の君らは色々と危なっかしい。だから一緒
に行くぞ」

「そうか、すまないな」

「俺は気にしてねえから、お前も気にすんな」

俺は手を振りながらそう言って、宿から外に出た。ジュードはそれ
からミラに何か言ったようだが、外にいた俺にはもう聞こえなかつ
た。

俺が外に出てから一分もせず、二人は出てきた。アルヴィンは海停
の出口にいたので、ジュードたちより一足先にアルヴィンの所へ行っ
た。

「……なあ、ゼニス」

「何だ？」

「……いや、やっぱり何でもねえ」

変なアルヴィンだな。でも何を言おうとしたのか、簡単に予想でき
る。

どつせ、ミラ＝マクスウェルに関係することだろう。もしくはアレ
関連。さっき、俺が小声で言ったのを聞きとってたからな。

「お、ジュードにミラ嬢」

「んじゃ、行くとしますか」

「二人が来たのでそう言い、頷き合っつ。」

「ミラ、確かここから北って言ってたよね？」

「どれくらいかかるんだ？」

「シルフの力で飛んだのなら、半日もかからない距離だろう」

「いやいやミラ嬢、それで分かるのは君だけで俺らには理解不能だ」

実際そうだろう。シルフを使役して空を飛ぶなど、普通はやらな
い。というかできない。

俺の言葉に、アルヴィンも肯定している。

「途中に休めるところが、あるといいんだけど」

「地図だと村があるみたいだったし、大丈夫じゃないかな」

「いずれにせよ、ここにいても始まらない。行くしかないだろう」

「ほいほい」

これによって、これからの方針……なのかは分からないが、北に行くということが決定した。本音を言えば北上したくないんだけど、しょうがないか。

俺たちは昨日と同じように、イラート間道を進んでいる。ただ昨日は間道の西方へ行ったが、今日は湖に用はない。なのでそのまま北へ向かった。

蛇足になるが、俺はニ・アケリアに行ったことはないが、近くを通ったことならある。だからあそこまでの道も、何となくだが分かる。迷うことはないだろう。

間道には昨日と同じく魔物がいるが、俺にとっては何も問題ない。たまに精霊術を使うのもいるが、滅多な事では俺に当たらない……

「ゼニス危ない！」

ジュードの声が聞こえて横を向くと、噂をすればなんとやら、風の精霊術が俺に向かって飛んで来た。まあ焦ることはなく、横に跳躍して避ける。そしてすかさず反撃する。

目には目を、歯には歯を、魔術には魔術を、だ。

「魔の腕よ湧き出でろ！ ネガティブゲイト！」

地面から幾つもの黒い腕が、引きずり込むようにして現れる。それは先ほど俺に精霊術をぶっ放してきた魔物、ゴブリンを消滅させる。次に、偶然俺の横にいたウルフに斬りかかる。

「散沙雨！」

これは、簡単に言えば連続突きだ。大鎌を持ち替えて、鎌の柄頭（柄の先端部分）での突き攻撃を放つ。剣ならば刃部分で突くのだが、鎌なので柄頭で突く、というわけだ。

「これで終了……っと。サンキュな、ジュード」

「ううん、大丈夫そうでしたよ。それにしてもすごいね」

「ジュードもいずね、これくらい強くなれるさ」

嘘ではない。事実、ジュードは戦闘の才能があるだろう。本人は護身術として習ったと言っているが、あれは既に護身の域を超えている。護身術で兵士を倒せるとは、兵士が可哀そうだ。仮にも訓練している身なのに、医者（護身術に負けるとか。その事実を知ったら）プライドがズタズタになるのではないだろうか？

というか、鎧を着てても痛いパンチって、どんな拳してるんだ？

ともかくこんなトラブルがあったものの、俺たちは順調に北へ進んでいった。

主人公の簡単な説明

ゼニス

・備考

大鎌を武器として戦う。大鎌の銘はシュヴァルツ。

鎌の柄頭、つまり柄の先端部分と刃の両方で、打撃と斬撃を使い分けるバトルスタイル。それ以外にも閻属性の精霊術が得意で、拳や足を使った技も使う。医者の仕事をしていたこともあり、単体回復型の精霊術（ファーストエイドなど）も使える。

髪の色は黒く、そして長い。でもTOVのユーリに似ているわけではない。

謎が多く、年齢も分かっていない。設定上は一応20歳となっている。

・ステータス

LV	40
HP	3050
TP	330
物攻	2320
物防	2205
魔攻	1610
魔防	1790
腕力	625
体力	520
知性	450
精神	485
敏速	620
器用	410

・キャラ特性：不明

・パートナー固定サポート：カウンター

リンクした仲間を庇った際に、硬直しないで攻撃し返す

第五話 望まぬ再会

イラート間道をしばらく北上し続けていると、ちゃんと村に着くとが出来た。これはいかにも田舎って感じた。

「果物がいっぱいだ。甘い匂いがするね」

「酒の匂いもな。果樹園でもやってるんじゃないか」

「……この酒、飲んでみてえな。美味そうないだ」

俺って結構酒好きなんだよね。今度来た時に飲もうかな？

……おっと、誰かが来た。見た目からして村長か？

「おやまあ、こんな村にお客さんとは珍しい」

「おばあさん、村の人？」

「村長をやっとります」

よし、俺、正解。やっぱり村長^{そご}だった。皆の衆、俺のことを尊重^{そんじゆう}しなさい。

……鬱だ。果てしなくごめんなさい。

「ニ・アケリアへ行くには、この道であっているか？」

「ニ・アケリアとは、またずいぶん懐かしい名を」

鬱状態になった俺に誰も気が付くことはなく、会話は進んでいく。
今の俺はどんななのかって？ orz になってる。だ〜れも気
付けてくれないってのはさ、かなり寂しいもんだよ。

「どういう意味？」

「忘れられた村の名じゃ。今ではあるかどうかもわからん。子供の頃
に、キジル海漠の先にあると聞きましたが……」

「キジル海漠？」

「……… 大きな滝のことだ。ニ・アケリアに行くまでには、半端なく起
伏の激しい岩場を通り抜ける必要がある。確かそうでしたよね、村長
さん？」

「おお、その通りですじゃ」

俺、何とか鬱から復帰。まだ厳しいけど頑張れる。

「え？ 何でゼニスが知ってるの？」

「前に一度、ニ・アケリアの近くに行ったことがある。その時に俺も
通ったからだ。この村には来たことなかったけどな。とにかく、あそ
こを通るなら少しは休む必要があると思っぞ？ かなり厳しい場所
だ」

「ふむ。経験者がそう言うのであれば、そんなのだろうな」

「村には宿がないですから。私の家に空き部屋があるので、使ってくださいませんかぞ」

「おばあさん。ありがとうございます」

という事で、今夜は村長さんの家に泊まることが決まった。だがまだ寝る時間ではないので、俺は一人で村を探索していた。……すぐに飽きて、家に行くことになったけど。

翌朝、目が覚めて外に出ると、ジュードがミラと何かを話していた。聞き耳を立てると、黒匣ツクシという物が何なのかを、ジュードが質問しているようだ。俺は知っていたことなので、聞くのを止めて近くの階段に座った。出るに出不れない雰囲気だからな。

だがしばらくすると、村の入口付近が妙に騒がしくなった。何かと見てみると、なんとラ・シュガルの兵士がいた。もう追って来たらしい。

って、あれ？ 知っている大男に似ている後ろ姿が……あ、やべえ。ジャオだ。

「どつちやら、これ以上のんびりしてるわけにもいかなそうだ」

いつの間にかジュードとミラのところへアルヴィンがいて、そう言った。俺もすぐに、三人のところへ向かう。

「やっぱり僕たちを追って来たんだよね……」

「さてな。国外捜査には早すぎる気もするけど」

「尋ねるわけにもいかないからな。どちらにしても見つかる前に出よう」

「ああ。村の西に出口があった。キジル海漠はあっちだろうな」

「出口が分かってるなら、さっさと出るぞ」

そこで俺たちは会話を止め、駆けだした。俺は今非常に焦っている。なので、村から早く出たい。ジャオに見つかる前に、早く。

村の西に着くとジュードが少し遅れてきたが、ちゃんと追いついてきた。何かしていたのだろうか？　そして出口から出ようと思っが、そこで問題が発生した。兵士が既に待ち伏せしていたのだ。くそつたれ、ジャオに見つかるじゃねえかよ！

「もう兵士がいる」

「どうするよっ？」

「強行突破だ」

「その案、賛成」

アルヴィンの質問にミラが即答し、俺も賛成する。何回も言うてるけどさ、早くここから出たいんだよ！　ハリー！　ハリー！　ポッター！

……「めんなさい」。

「うん。僕もこれ以上集まる前に抜けちゃった方がいいと思う」

「短い作戦会議だこと」

それで俺たちは突撃しようとするが、後ろから声が聞こえた。

「あ、あの……」

「女の子？」

そう、話しかけてきたのは女の子だった。

「え、えと……なにしてる……んですか？」

「ふむ。邪魔な兵士をどつするか、考えていたところだ」

「……直球だね」

「さすがはミラ嬢」

ミラの言葉にジュードが少し呆れ、俺が称賛する。普通は言えねえよ、そんなふうには。

「あの人たち、邪魔……なんですね」

彼女は何とも思わなかったのか、腕の中のぬいぐるみを見やる。するとそのぬいぐるみは目を見開き、突然動き出した。俺を含め、全員が驚く。知ってても怖いよこれ。何せ、無機物が突然動くんだもの。

「うわー！ なんだこれ！ ひー！」

「いねは……」

そのぬいぐるみは兵士の頭上をフワフワと浮かび、兵士はそれに恐

怖する。まあ、怖がってしまっ気持ちは分かる。俺でも、何も知らなかったらビビる自信がある。

それを見たアルヴィンが意味深に呟くが、俺以外には聞こえなかったようだ。アルヴィンはあれを知ってるのかね？

「どっなってるの？　ぬいぐるみが??」

見た目はただの……否、ちょっと怖いぬいぐるみが勝手に動くことに、ジュードは驚いている。ジュードだけでなく、ミラも驚いているだろう。

……それはそうと、近くに黄色い服を着た、横にも縦にもデカイ巨漢がいる。とか言っって現実逃避している場合じゃないか。はあ、ジャオが来ちまった。

「……で何をしておる……っ!?　お前さん、まさか……」

そこまでジャオは言ったが、俺は口元に人差し指を持っていく。黙って欲しいときによくつかう仕草だ。俺以外にもこれを使う人はいるはず。

ジャオはそれに目で頷き、顔を女の子の方へ向けた。

「……、娘っ子。小屋を出てはならんというに。ラ・シュガルもんめ、勝手な真似を」

エリーゼに注意してから、兵士を見てそちらへ走って行った。その圧倒的な強さで兵士をハンマーで殴り倒している。今日の見張り役、かなり哀れだ。

そして先程の女の子は、その間に村の広場へ行ってしまった。

「娘っ子は、どっへ行った?」

「あの娘なら、広場へ行ったぞ」

「なに？ い、いかん！ お前たちよそ者だな。ならとつと行ってしまえ」

エリーゼが広場に行ったことを伝えるとジャオは一瞬焦り、俺以外を見ながら、さっさと行けと乱暴に言ってから走り去った。

……一瞬俺のことを見た気がしたが……気のせいだろ。うん、気のせいだと思いたい。

「よくわかんないけど、手間省けたみたいだな」

「なら、早く出よう」

ジュードの提案にみんなが頷き、急ぎ足で村から出る。それにしても……結局ジャオの奴に見つかっちゃったよ。後がめんどくさい！

「なあゼニス、あのおっさんと知り合いなわけ？ おたくを見て驚いてたけど」

「知り合い……まあ、一応知り合いだな」

ハ・ミルを出ると、そこはガリー間道という道だった。進んでいるときにアルヴィンに聞かれたのでそう答えた。

この間道はそこまで長い道ではなく、起伏も乏しいので歩くのに全く問題ない道だった。あと今までより多少魔物が強い気がするが、俺には関係ない。ジュードやミラに戦わせているからな。俺はそれを傍観中。

「ね、ねえ。少しはゼニスも戦ってくれない？」

「何を言うか。俺は今も必死に戦っているぞ！ ……睡魔と」

「ゼニスは何回寝れば気が済むのだ？」

「一日中寝ることができれば満足」

「おい、おたくは一応医者だろ。健康に悪いことしていいのか？」

「む？ 一日中寝るのは健康に悪いのか？ 寝る子は育つと聞いたが」

「えっとね、ミラ。それは赤ちゃんのことで、そもそも人間は……」

「ちょっと待て。一応って何だ、一応って。俺は立派な医者だ」

「……へえ。立派な医者、ねえ」

ジュードがミラに何か色々教え始めたけど、ああそうでしたね、常識に疎いんでしたね、このマクスウェル嬢は。それにしてもいやほんと、最近マジで眠いんだって。

そしてアルヴィン、貴様は失礼だな。何だその目は。

そんな会話も入れつつ、間道を東から西へ渡っていく。そして到着したのが、一面水だらけの岩場、キバル海漠。ここを超えれば、今の所の目的地、ニ・アケリアだ。幸い、ラ・シュガルの連中もここまでは追って来ていない。

「村の人たちに、悪いことしちゃったね……よくしてくれたのに」

「ラ・シュガル兵が来てるんだ。逃げるが勝ちってな」

「どうするか決めたのは、彼らだ」

「僕らを守ってくれたのかもしれないだし、そんな言い方しなくても……」

これと言うのも何回目か分からんが、言わせてもらおう。ジュードはお節介だなあ。

最近稀に見る、本当に優しい心の持ち主なんだろうけど、これが原因で医学院では陰口叩かれてたしなあ。また間接的に注意しとくか。

「ジュード、今更言っても遅い。もう過ぎたことだし、気になるなら戻ればいい」

「ふむ、それもいいだろう。短い付き合いだったが、色々感謝している」

「どうしてそうなの？」

「……もっと感傷的になって欲しいのか？」

ミラのその言い方に、ジュードは気になったらしい。まあミラも悪いとまではいかないけど、ちょっとな……。

ミラはミラで、精霊の主としての使命がある。だからこそ、人間の言葉にもあるが感傷に浸っている暇はない、というところらしい。

「……使命があるから？」

「そうだな」

「やるべきことのためには感傷的になっちゃいけないの?」

「人は感傷的になっても、なすべきことをなせるものなのか?」

「わからないよ。そんなの……やってみないと……」

わからないと答えるジュードに、ミラは優しく微笑んだ。

「なら、やってみたらどうだ? 君のなすべきことを、そのままの君で。それなら答えが出るかもしれない」

そこまで言いつつ、ミラは後ろを向き、周囲を見渡し始めた。

「僕のなすべきこと……」

「マクスウェル様のようにする必要はないだろうさ。普通、ああはなれないって」

「俺も、アルヴィンの言葉に同意するよ。俺だってミラ嬢のようにはとてもなれん」

俺達の言葉に、ジュードは少し考える仕草をする。

「ねえ、二人にはなすべきことってある?」

「……さて、な。あるって言ったら余計迷うだろ。ジュード君」

「え?」

「そうそう。お前のことだから、僕も決めなきゃって悩むだろ。な、アルヴィン?」

「ああ、全くだ。そんな姿が目に見えかぶよ」

「……………」

俺とアルヴィンの軽口に、ジュードが睨んできた。怖い怖い。

「んで、どうすんの？ 村に戻る？」

「……………」

「んじゃ、行けよ」

アルヴィンの問いに、ミラを見ながらしばらくジュードは黙った。だが答えは決まったらしく否定の言葉を口にする。決心を固めたようだ。ほんと、気持ちの切り替えが早い。

それにこんな流れを見ると、アルヴィンが良い兄貴分に見えてくるから面白い。実際には腹の中で何を考えているのか知らんがね。

……………まあ、俺も人のことはいえないけどな。

第六話 キジル海漠と二つ目の再会

キジル海漠は今までに見かけない魔物だらけだった。ほとんどが水に棲む魔物で、攻撃方法も水の精霊術や泡飛ばし。もしくは体当たりくらいだ。

しかもキジル海漠は特殊な霊勢下にあるので地形も奇異であり、槍のような岩が地面から生えている。そのせいなのか段差が激しく、進むのが一苦労。

それでもめげずに奥へ進んでいくと、大きな滝のある場所まで到達した。

「もうすぐニ・アケリアか。どんなところなんだろう？ いいところなの？」

「うむ。私は気に入っている。瞑想すると力が研ぎ澄まされる気がする。落ち着けるところだ」

「へえ〜」

ジュードとミラの会話を、俺はその後ろで聞いていた。ニ・アケリアは俺も行ったことのない場所なので、結構楽しみにしている。

と、そこでアルヴィンが両手を上げてこう言った。

「ちょっと休憩。岩場歩きで足痛え」

「到着してから、休めばいいだろうっ？」

「そう言うなって。ニ・アケリアは逃げやしないさ。な？ 休もうぜ

「？」

「あ、うん。じゃあ、そうしようか」

ジュードの肩にアルヴィンが手を置いて、休むように催促する。ジュードは『ノー』と言えないリーゼ・マクシア人（？）なので、それに賛成した。よって休むことになったが、俺は特にすることがなかった。なので適当な岩を椅子代わりにして座り、海中を泳ぐ魚を見ていた。これが結構癒される。

……魚と言っても魔物もいるが。目がギョロギョロしてキモいのは即殺す。

「う……ぐあー」

……今聞こえたのはなんだ？ 誰かの呻き声にも聞こえたけど。

あ、俺以外にも聞こえたらしい。ジュードとアルヴィンが奥へと走ってる。

「なんか、面倒事が起きそう……」

もはやほとんど覚えていない原作知識を思い起こそうとするが、一向に思い出せない。でも俺一人だけ行かないのはあまりにもおかしいので、とりあえず行ってみることに。

そして後悔した。

そこにいたのは、ジュードとアルヴィンとミラ。それはいいが、ミラは一人離れた岩場で、捕縛用の精霊術によって捕まっている。それが問題点だ。

そして何より、ミラを捕まえている人物がさらに問題だ。少なくとも、俺にとっては。

「……はあ」

「ここで思い出す原作。どうせなら、もう少し早く思い出したかった。そうすればここに来なかったのに。と、思わず溜息をついてしま

う。
ミラを捕まえていたのは、猫耳に猫の尻尾を持ち、メガネを掛けてイケナイ系の服を着ている抜群ボディの持ち主、プレザ。

先ほどのジャオ同様、見つけられなくなかった人物の一人である。なので見つかる前に離れようとしたが、そうは問屋がおろさなかった。

「あ、ゼニス！」

俺の溜息をジュードに聞かれたらしい。大声で名前を呼ばれた。どうやら、おろさなかったのは問屋ではなくジュードのようだ。

「ついでに殺意が湧いたのは秘密だ。俺よ、クールになれ！ be kool！ あ、間違えた。 be cool！」

「なっ……ゼニス様!？」

そしてプレザにも呼ばれる俺。しかも『様』が付属されている。そのせいで三人の連れから驚きの目で見られている。ははは。俺、終わった。

「ゼニス!? あの人を知ってるの!？」

「あゝ、まあ知ってる。あと、お前とは久しぶりだな。……何やってんだ?」

ジュードの質問に答え、プレザを見て話を変える。

しかしあれだな。美女が美女の服を弄もよほっているのを見るのは、

ちょっと刺激が強い。簡略に言えば、エロい。

「……マクスウェルの隠した『カギ』を探しているのですが、ゼニス様は何かご存じないでしょうか？」

『カギ』。それはおそらく『クルスニクの槍』の『カギ』のことだろう。だが俺は現実に見てない。だから実際には知らない。

……しかし、クルスニクの槍と鍵か。まったくもって面白いネーミングだよ。

「すまんが知らない。それと今俺はこいつらの仲間だから助ける義務があるんだが……お前とは戦えないしなあ」

そこまで言った俺は、プレザの方からジュードたちを見てこう伝える。

「というわけで、今回俺はどちらの味方にもなれない。ミラ嬢には本当に悪いが、あいつは俺の知り合いでね。とても戦えん」

「な、ゼニス!？」

「……わかりました」

戦う意思なし。そういう意味を込めて、俺は両手を上げて後退する。ジュードは非難めいた口調で俺の名を呼び、プレザはどこか諦めたように了承した。

ジュードにミラ、本当にすまん。

それにしてもプレザ、見ない内に綺麗になったな。ここしばらくは手紙のやり取りしかしてなかったけど、久しぶりに見たこともあって綺麗感が増した気がする。というか今更だけど、猫耳にメガネはマニ

アックだと思っるのは俺だけか？ 似合ってるし美人だから文句ないけど。

「アルヴィン、そのまま聞いて」

ふと耳を澄ますと、ジュードが小さな声でアルヴィンに話しかけていた。ミラは捕まって動けなく、彼らもそのせいで動けない。下手に動いたらミラがどうなるかわからないからだ。とはいえ俺がいるので、プレザもやり過ぎはしないだろう。

そしてどうやらジュードは、この状況を打破する案を思いついたらしい。アルヴィンにしか聞こえない程度の声量で話している。それを聞いたアルヴィンは、銃をプレザに向ける。

「あら？」「この娘は見殺し？ ひどいコト」

銃を構えたアルヴィンを見て、プレザは焦ることなくそう言った。そしてアルヴィンは銃をプレザから少し離れた岩場へと向きを変え、撃った。

一体何をして……っ!? 岩が動いた？ あれは擬態した魔物か!?

「え？」

「くそっ！」

プレザにも岩が微動するのが見えたのか、そこを注視する。俺は次に何が起きるのか分かったので、急いで水中に飛び込んだ。

岩に擬態していた巨大魔物、グレーターデモッシュは俺の予想通り、プレザに向かって突撃した。その衝撃で彼女は岩の下にある水場へと吹き飛ばされる……はずだった。俺がいなければ。

「よつと。大丈夫か？」

「は、はい。大丈夫です……」

吹き飛んでことに変わりはないが、プレザが水に当たる直前に俺が水中から飛び出し、俗に言うお姫様抱っこでキャッチしたのだ。そして俺はそのまま少し離れた場所まで行き、プレザを降ろした。心成しか、顔が赤い。お姫様抱っこはやり過ぎたか？

ちなみにミラは、グレーターデモッシュが擬態を解いたことに驚いたプレザが捕縛から離してしまったので無事だ。

「申し訳ありません。私の不注意のせいで……」

「気にしなくてもいい。あれは俺でも気付くのに遅れたほどだからな」

俺が軽く励ますと、プレザは軽く笑った。だがすぐに真剣な表情になり、聞いてきた。

「ゼニス様、なぜマクスウェルやあの男……アルと一緒に？ それと、今までどこにいらしていたのですか？」

アルとはアルヴィンのことだろう。前の任務で一緒にいたらしいから、それで親しくなった……んだっけ？ そんな時に何か他にもあった気もするが……思い出せん。

「それはまた今度教える。どつせならあいつらがいる時に、一度に伝えた方がいいだろ。何回も同じことを言うのは面倒だ」

「そうですね。相変わらず、お変わりありませんね。その『面倒だ』と

いう口癖……。了解です。では、一時退くします」

「そうしてくれ。俺はまだ、あいつらと一緒にいるからよ」

クスリと笑いながら俺の癖を指摘し、プレザは去って行った。おそらく、あいつらの所へ行くのだろう。俺も後で顔を出しておくか。

そしてジュードたちがいる場所に行くと、未だに勝負がつかないようであった。とはいえ俺がプレザと話していたのは一分にも満たないので、むしろ終わっていたらおかしい。

「お前の背後、がら空きだぞヤドカリ野郎。獅吼旋破！」

ジュードたちと戦っているせいで俺に背を向けているヤドカリに、回転斬りから獅子の形をした闘気を放つ。所謂不意打ちだ。

これがゲームならレベル差やステータスの差もあって即死級のダメージなんだろうが、これは現実。大ダメージは与えられたものの、そんな簡単に勝てるわけがない。

小さい魔物ならまだしも、こんなギガントモンスターが相手じゃ一撃で倒すのは無理だ。遊び心や手加減もあったしな。

「ゼニス！ どこに行ったの!？」

「今はそれより戦うことに集中しろ！」

「わ、わかった！」

俺に質問してくるジュードに、注意という話題転換をして再び向き合わせる。言い訳を考えてる最中なので、今聞かれると困るわけだ。さて、

「んじゃ後はいつも通り、君らで頑張ってくれたまえ」

「結局それか！ お前も元は傭兵だっていうなら手伝えー！」

アルヴィンの怒鳴り声を無視し、近くの岩に座る。なんせ俺のモットーは『やられたらやり返す』であるがゆえに。つまり、俺は滅多な事では自分からは攻撃しない！

……はい、嘘です。単に雑魚が相手では戦う気が起きないだけです。すみません。

でも『やられたらやり返す』は本当。攻撃されたら容赦はしない。どっかの某仮面の男も言ってるだろ？ 『撃っていいのは、撃たれる覚悟のあるやつだけだ』ってさ。というわけで、

「ふんっー」

目前に迫った触手をぶった斬る。あのヤドカリ、さっきの仕返しのもりか俺にも攻撃してきた。俺を捕まえようとしたのか、触手を伸ばしてくる。なので反撃として、向かってきた触手を切断した。ついでにちよつと本気出してやる。

「俺にも攻撃したことを、後悔するんだな。ほれ、シャドウエッジー」

これは俺の得意とする精霊術の1つだ。闇属性の刃を地面から生み出して、垂直に突き上げる、下級精霊術。それのより、巨体が軽く地面から離れて……

「続けて喰らえ、ブラッディクロス！」

闇の刃だけでなく、加えて同じ闇属性の十字架が奴を襲う。それでもこの巨大ヤドカリはまだ生きてるので、連撃を放つ。今度も精霊術で。

「黄泉へと誘う魔狼の咆哮……」

闇属性の精霊術の中でも、最上位に入る上級術。他にも使えるが、まだ使わない。

というより、もったいない。いやこの術もやり過ぎだけどね。

「響き渡れ！ ブラッディハウリングー！」

地面に魔法陣が描かれて、そこから闇の波動とも言つべきものが立ち昇る。黒い波動に飲み込まれたグレーターデモッシュは、やはり大ダメージを受けたようで、この精霊術によって事切れた。

「すげー……」

ジュード、ミラ、アルヴィンは今の連続攻撃に驚いているようだった。

あと説明しておくけど、俺は精霊術より接近戦の方が得意です。今日は精霊術の気分だったから、こっぴつたってわけ。

「しかし、魔物が岩に擬態してたのか。よく気づいたな」

アルヴィンのその言葉を聞いて、ミラは思い出したかのようにジュードに詰め寄った。

「魔物があの女でなく、真っ直ぐお前たちに向かうとは考えなかった

のか？」

「それでもよかったんだ。そうすれば、アルヴィンがあの人の死角に入れる位置だったからね」

「すごいな。あの一瞬でそこまで……」

「大したものだ。誰にでもできることではないな」

「僕にしかできないこと……」

ミラの言葉に、ジュードは拳を握りしめた。誰にでもできることではないという言葉が、余程嬉しかったのだろう。

「ありがとう、ジュード。アルヴィンとゼニスも」

微笑ながらの礼を言われ、ジュードは赤くなった。照れてるんだな、アレ。ずいぶんと初心なやつだ。

「そうだ、さっきの人は？」

「優等生。悪い奴まで気にしてたら、日暮れるぞ。ほら、行こうぜ」

「でも、ゼニスの知り合いみたいだったし……ねえ、何でゼニス様って呼ばれてたの？」

ジュードの疑問に、他の二人も俺を見た。まあミラにとって、プレザは自分を襲った人物だ。何で俺があいつに様付けで呼ばれているのか、それくらいなら教えてもいいか。

「十年くらい前……もっと前か？ とにかく結構前に、あいつの命を

助けたんだ。とある理由で死にそうになってたんでな。そのあとしばらくの間、俺の部下として行動してたんだよ。たぶんその名残だろう。最近は会ってなかったし」

「ふむ。それでは、今はどこに所属しているか知っているか？ 何者かの指示を受けたようなのだが」

「……見当は付く。だが確信がないから言えない。傭兵だったころの癖だから、そこは勘弁してほしい」

「そうか……わかった。確信を得たら教えて欲しい」

「……了解だ」

そうは言ったが、実際は知っている。確信を持って、あいつが誰の下にいるのか教えられる。でもそれは、今言うべきことではない。というか俺の立場上、言えない。

そしてそこから移動して、もう少しでニ・アケリアに着くというところで、ジュードがアルヴィンに質問した。

「ねえ、アルヴィンもさっきの人と知り合いだったの？」

「あー、あれね。なんか向こうは知ってたみたいだけど、俺は……」

「傭兵とは、恨みを買う商売のようだな」

「そ。アルヴィンはどうだか知らないが、俺はいつ仕返しされるかヒヤヒヤしてるよ」

「ゼニスなら返り討ちにしちゃいそうだけど……でも、キレイな人

だったね」

「ああいうのが好み？ ジュード君は年上好みか」

「よくわからないけど、そうなのかも」

アルヴィンがジュードの発言に対してからかうが、意外なことに肯定した。でもプレザが綺麗だということについては同意するが、あの露出の多い服はいただけないと思ったのは俺だけではないはずだ。というか何で誰もそこに突っ込まないんだよ!? ゲーム補正か!?

……ちなみに俺はああいうの、大好きです。だって、男だもの。

第七話 集合

その後すぐ、目的地であるニ・アケリアへ到着した。キジル海漠を抜けてすぐだったので、途中で迷うようなことは無かった。

「ここがニ・アケリア、か……ミラ嬢にジュード、俺はここで一旦別れるよ」

「え!? な、なんで?」

「ふむ、いきなりだな。だがなぜだ?」

村に着いてすぐに言った俺の言葉にミラは普通に返してきたが、ジュードが過敏に反応した。何でそんなに驚くんのだ?

「ミラ嬢の話によれば、ジュードをここで匿ってくれるんだろ? ならしばらくの間は俺も面倒見るために居座るだろうから、その前にここら一带を見て回ろつと思っとな」

「面倒を見るって、僕を?」

「それ以外に誰がいる? 俺から見りゃ、お前はまだ15歳の子供^{ガキ}だ。もっと俺のような大人を頼れ」

「ゼニスはどこかしら僕よりも子供っぽいと思っけど。でも、ありがとう」

「ん? ……何で礼なんか言っんだ?」

「うっん、ちょっと嬉しくて」

嬉しいというのはよくわからないけど……まあ、それだけじゃないんだけどな。ここで、「あいつら」の気配を感じた。だから本当は会いたくなかったが、腹を括って会うことにした。もうプレゼとジャオには会っしまった訳だし。

……ここまで言えば、俺が誰と会おうとしているのか分かるよな？

「でもゼニスだって20歳でしょ？ 大人って言っても、まだ僕とあんまり変わらないと思うよ？ 大人になったばかりなんだし」

うっせ。いいんだよ、前世も合わせれば30は超えるし。

……親父臭くならないように気を付けなければ。

「ま、そついう訳だ。ジュードとミラ嬢は後で会うだろうからいいとして、アルヴィン、縁があったらまた会おう。精々死なないように頑張れ」

「はは、忠告ありがとうございます。おたくも色々頑張れや」

「うちは言ったけど、記憶が間違っただけじゃまた会はずだ。でも前もってそう言っておかないと不自然になる。それにここから離れる他の言い訳が俺には思いつかない。だから、「また後で！」と言い残し、村の周囲を巡る振りをした。」

ジュートたちは世精石なる物を運ぶ手伝いをしていたので、絶対に彼らに会わないようにして、この先にあるニ・アケリア参道へと急いだ。案の定、世精石はニ・アケリアの4カ所にバラバラに配置されていたので、簡単に先回りすることが出来た。

「はぁ……邪魔……」

だがその参道で俺を待ち構えていたのは魔物の群れ。今までより少し強い程度の魔物が複数いるだけなので障害にはならないが、対処するのも面倒だ。それにここはジュードたちも通るから早く進まないと鉢合わせしちまう。

「爪竜連牙斬！」

俺の周りを囲んで跳びかかって来たので、周囲を攻撃できる技で掃する。ただこれ以上倒してしまつと、後から来るあいつらの分がなくなる。ちゃんと戦わないと、あいつらが成長できないからな。

そして現在、俺はミラが祀られていたであろう社……の近くにある森にいる。ちょうど社が見える位置で、ミラたちではない、あいつらの進行方向にぶち当たる。まだ来てないので、待つために木に登って太めの枝に腰を掛け、足を伸ばす。背中が幹に預けているので、バランスもとれている。

そのまま気配を殺して待っていると、俺の待ち人よりも早くジュードたちが来た。俺は森の中にある木に登っているの、向こうからは見えない。少し話した後、三人は社の中へ入って行った。それからしばらくして、それを追うような速さで一人の男が社へ突っ込んだ。たぶん巫子のイバルだろう。俺あいつ嫌いなんだよね、色々。

そしてそのすぐ後。二人分の気配が近づいて来るのを感じた。これは俺が待っていたやつらの気配だ。やっと来た。

その二人は、丁度俺の座っている木の真下まで歩いてきた。

「あれがマクスウェルの祀られている社か」

「ええ、今あの中に入って行った男。あれは巫子と見て間違いないかと」

俺が待つていた者。それは鎧を着た男と黒装束を着た男。そう、ガイアスとウインガルだ。プレザやジャオ、そして今回の件で分かるかもしれないが、俺はア・ジュール側だ。

でもイル・ファンにいたのはスパイとかではなく、単純にジュードやミラと知り合いたかったからだ。ガイアスたちに情報を教えるつもりもないしな。

俺は私情を仕事に持ち込む奴だから。

普通は持ち込んで駄目というか持ち込むなんぞありえないが、俺は持ち込む。だから命令されたとしても、任務ではなかった時の事は話さない。あいつらもそれを充分理解している。

「正解、あれが巫子だ。ついさっき、マクスウェルもあの社に入ってしまったぞ」

「何者だ！　っ!?!……お前、ゼニスか？」

俺の突然の声に驚き、二人が俺の方を、つまり木の上を見上げた。咄嗟に剣を構えるのは、相変わらず流石だ。急なことに対処できるよ、瞬時に抜刀していた。

だが、俺の顔を見て二人の顔はさらに驚きの色に染まった。まあ俺は数年間、居場所を知られぬように連絡していた。そんな俺が気配を消して、いきなり声を掛ければそりゃ驚くよな。

「むしろそれ以外の誰に見える？　しかしお前らのそんな表情、珍しいな。結構いいもんが見れたよ」

「前と変わらず、趣味が悪い……ですが本当にお変わりないよつで」

「ウィンガル。それ、プレザにも言われたよ。……ああそうそう、それで思い出した。ここに来るまでにプレザとジャオの二人に会った。あとで合流するつもりなんだろう？ そんな時に説明するから、今は待つてろ」

「……いいだろう、後で説明してもらおう。だが、今マクスウェルと共にいるのは誰だ？」

「なし崩し的に巻き込まれた医学生と、偶然出会って雇われた傭兵だ」

ジュードとアルヴィンのことだ。どっちがどっちなのかは言うまでもない。ガイアスも見ればわかるだろう。

それからもじつとしていると、三つの陰が社から出てきた。ジュードにアルヴィンと、イバルの三人だ。イバルがジュードに何やら言うて、不機嫌そうに帰っていく。

「あの男……アルヴィンか？」

「ああ、またしても正解」

どつやら、前にプレザから詳しく聞いたらしい。それで知っていたよつだ。

そして彼らを見てみると、アルヴィンが下にいる二人に気付いた。こつちを見ている。でも、木の上にいる俺には気付いていない様子。ジュードに2、3回言葉を掛け、社と参道を繋ぐ階段を下りて行った。ガイアスがそれを追って行ったので、俺は木から下りてウィンガルの後方から追つようにして参道へ向かった。

その参道の魔物で俺たちが苦戦するはずもなく、順調に村まで進

む。

「どうやら、腕は訛っていないようだな。相変わらず鋭い。それどころか、さらに鋭さが増している」

「まあ、それでも鍛錬はしていたからな」

数年振りの会話だというのに、まるで昨日も会っていたかのように話す。ストーリー的にしばらくは戦えないだろうが、それでもガイアスと話するのはジュードとはまた違った楽しさがある。

「おっと、そろそろお前らとは離れる。まだアルヴィンには気付かれたくないんでね」

「そうか。だが、後で合流してもらおうぞ」

「もちろんだ。それくらいは承知している」

村に着く直前でそう言い、二人と別れる。理由は今言った通りだ。アルヴィンに、いや、他のやつ等にも、俺がア・ジュール側だと教えるのはまだ早い。

二人から少し離れた場所まで行って陰から見ていると、案の定アルヴィンが二人に接近した。ガイアスはミラのことなどを聞き、『カギ』の居場所を探るようにと依頼した。

「ゼニス、どうせ近くにいるのだろう。出てこい」

「お、やっぱり分かったか」

見抜かれていたので陰から出て、ガイアスとウインガルの所へ向かう。そこは村のほぼ全体を一望できる、ちょっとした高台だった。

「タイミングが良い。来たか」

俺の後ろを見ていたウィンガルがそう呟く。俺は気配を察していたので、わざわざ振り返ることはしない。

「さっき振りだな、ジャオにプレザ。改めて久しぶり」

来たのは四象刃フォーエブの二人だ。それぞれハ・ミルの村とキジル海漠で再会した、ジャオとプレザ。

「ええ、本当にお久しぶりです」

「これでアグリアとあやつがおれば、久しぶりに全員が揃ったのがのう」

「はは、確かに」

ほんと、アグリアもいればよかったんだけどなあ。あいつは今、イル・ファンにいるから無理なんだよね。どうせなら、街を出る前に会っておけば良かったかな？

ん？ ジャオが言った『あやつ』ってのは誰なのかって？ これも、今はまだ秘密。

「さて、ゼニス。どこにいて何をしていたのか、話してもらおうぞ」

「おう。そつだな、どこから話そつか……」

俺は話した。数年前にア・ジュールを出て、その後ラ・シユガルへ行ったことを。

そして、イル・ファンで医者をしていたことを。ちなみに、ア・

ジュールから出る前にガイアスから出国の許可は貰っている。一つの条件付きで。

そこまでの経緯を言つと、プレザが話し出した。

「そういうことでしたか……では、私が助かったのはそのおかげ、ということですね。改めて、その際はありがとうございました」

プレザは一時期、イル・ファンの医学校に潜入していたことがある。それが見つかってしまった時があり、偶然それを見つけた俺が彼女を助けた、という経緯がある。

まあイル・ファンで働き始めたのは、それが切欠なただけだな。

「おう。けど、あんま気にすんな」

「それは無理です。……ですが一つ気になっている事がありました。イル・ファンにはアグリアがいたはずです。あれ以降、私達は一度もゼニス様を見ていませんが？」

「そりゃお前がいる期間、俺は傭兵稼業をしていたからな。助けた日は偶然にも仕事がなかったんだよ。それでアグリアからお前が帰ったという報告を聞いてから、医者になったというわけ」

「ではアグリアは、ゼニス様がイル・ファンにいたことを知っていたのですか？」

「ああ、医院にアグリアの目付け役がいて、その人から伝わったらしい。だから俺ん家がどこにあるのかを教えて、お前らには何も伝えないうように取引したんだよ」

……俺の家に遊びに来てても良いという許可の代わりに、って冗談のつもりだったのに、マジで伝えてないことには驚いたけど。

「そういつとか……そこまで分かればもう良い。」の話題は終わりだ」

言い終わると同時に、ガイアスは視線を下方にずらした。その先には、ジュードとミラがいる。村の入口付近だ。……もしかして俺を待ってるのか？

「あの女がマクスウェルか。プレザ、確かに力を失っていたのだな？」

「はい。そのことはゼニス様も存じているかと」

プレザの言葉に反応して俺に視線が集まったので、頷いて肯定しておく。嘘を言う必要なんか皆無だし。

「既に『カギ』もどこかに隠された可能性があるとなると、少し面倒だな」

「しめんなさい。悔ったわ」

ウィングルの言葉に、プレザは自分に非があると認めてすぐに謝る。いいよねこの姿勢。最近の若者にもおしえてやりたいよ。ちなみにジュードは謝りすぎ。

「あの娘がマクスウェルと知っておれば、ワシも『カギ』のありかを吐かせたのじゃがのっ」

「言われる前に言っとくが、俺が聞くてのは無しだぞ。今まで聞いていなかったから怪しまれる。あの二人は俺がプレザの知り合いだと知ってるしな」

「ミラを襲った女が捜してるものって、どこにあるんだ？　なんて聞けるわけがない。」

「どこにあるのかなんて、覚えてるわけもないし。」

「確かにそつだな……まあいい。今となっては泳がせた方が都合がよかるっ」

「ええ。ラ・シュガルの目は奴らに向けさせ、我らは静かにことを進めるのが得策かと」

「アグリアから何か連絡は？」

「失われた『カギ』を新たに作成するという動きがあるとか」

「……捨て置けんな」

新しい『カギ』か。本当か嘘かわからんが、ラ・シュガルも面倒なことをする。

「ジャオ、例の娘の管理はもういい。お前は『カギ』の件を探れ」

例の娘……ああ、あの女の子のことか。あの娘ってジャオが管理、もとい世話をしてるんだっけ？　村の人たちからは好かれてなかったよっただけだ。

「いや、しかし……」

「ラ・シュガル兵どもが去ったというのなら、もうお前が直々につく必要はない」

「データが無事なんだから、優先事項が変化するのは当然ね」

「う、うむ……」

最初だけジャオは渋ったが、ウィンガルとプレザの正論を前に反論できなかった。一応返事はしているが、どこことなく不満そうだ。情が移ったのかな？

「プレザ、アグリアと連携をとってイル・ファンに潜れ」

「あら、マクスウェルはいいのかしら？」

ウィンガルの言葉に、プレザが質問した。

「ああ。まだ駒はある。『カギ』のありかも探らせる」

「……俺は今まで通り、彼女らと共に行動する。チャンスがあれば『カギ』のありかも聞きだすさ。それでいいな？」

「構わぬ。だが今度は帰ってこい」

「はは、了解だ」

その言葉を最後に、俺たちは別れた。これからあいつらが何をするのか分からないが、とりあえず俺はしばらくの間、彼らとの旅を楽しむつもりだ。

……近い将来、ジュードやミラに裏切り者呼ばわりされるのだろうか。

第八話 新たな仲間

ガイアスたちと別れ、高台から二・アケリアの入口付近にいる二人の所まで歩く。

アルヴィンはいないが、あんな所で何をしてるんだ？ やっぱり俺を待ってるのか？

「ジュードにミラ嬢、んなどこで何やってんだ？」

「あ、ゼニス。よかった。丁度ゼニスを捜してたんだよ」

「俺を？ 何で？」

「ジュードが私と一緒に来ると言っていてな。それで、君はどうするのかと聞いておきたかったのだ。私個人としては、君は戦力になるから共に来てほしい」

ああ、だから俺を待っていた、もとい捜していたわけか。

「そうなのか？ だけど後悔するんじゃないのか、ジュード？」

「アルヴィンにもそう言われたけど、決めたんだ。ミラの手伝いをするって」

「なるほどな………わかった、俺も一緒に行く。旅は道連れ世は情け、だ」

「そうか。なら、よろしく頼む。ゼニス」

「ああ、「じせら」そよるじく、ミリア嬢。それにジュードもな」

ガイアスに頼まれての監視という目的もあるから申し訳ないが、俺の本音としてもこの二人と旅を試みたい。そんな気持ちがある。

まずは村を出ないと何も始まらないので、ニア・ケリアから出発。キジル海漠へ行く途中に、さりげなく大精霊はどうなったのかを聞いた。あの時何が起こったのか知ってはいるが、本来なら俺は知らないはずだからな。そして返ってきた答だが、『精霊の召喚は出来なかった』だ。

ミリアとジュードがイル・ファンの研究所を見た、“クルスニクの槍”に捕らわれているのでは、というのがジュードの考えだそうだ。

「それで、これからどうする予定なんだ？ イル・ファンへ船で行くのは流石に無理だ。山脈越えもたぶん無理だから、ア・ジュール陸路というのも無しだ」

そしてキジル海漠に着いたので、これからの事を聞いておく。イル・ファンの海停へと直接行くのは、あまりにも無謀なので釘を刺しておく。

「それなのだが、私もそのことを考えていた。ゼニス、他に道はないか？」

ミリアがそう聞いてきて、俺は少し考える。そして言おうとしたところで、誰かが同じことを言った。

「それなら、サマングン海停からカラハ・シャルル方面に行けばいいんじゃないか？」

「アルヴィン!？」

そう、アルヴィンだ。見た所、キジル海漠まで一人で来たようだ。

「これはこれは。どうしたんだアルヴィン、次の依頼か？」

「その通りさ。あのイバルとかいう巫子殿に頼まれてね」

「そうか。ゼニスだけではなくアルヴィンもか。心強いよ」

「……いやあのさ、ミラ嬢。感動しているところに悪いんだけどさ、イバルって誰よ？ それに巫子って？」

俺は知識として彼を知ってるが、面識はない。あの時いなかったわけだし。

だから不自然に思われないように、それとなく聞いてみる。案の定、ジュードがすぐに教えてくれた。ほんっとに良い奴だよな、お前。

「それじゃ、まずはハ・ミルでいいかな、ミラ嬢？」

「ああ、そうだな。そこでラ・シュガル軍の動向も探るとしよつ」

ジュードもそれに異議は無いようなので、方針が決まった。ここに来た時と変わらない道を逆行し、大した苦労もなくハ・ミルに到着。今回は俺もちゃんと戦闘に加わったので、着くのは前より早かったと思う。

「まったく。そんなに強いなら、もっと早くから戦ってくれればよかったのに」

「あんな雑魚だと、どうにも戦つ気が起きないんだよ。それによつぱ

どの事がない限り、やる気も出なくてな……ん？」

話しながら歩いていると、何やらおかしい光景が見えた。何人もの村人が、石を何かに向かって投げている。

だがよく見てみると、それは『何か』ではなく、人だ。それもかなり幼い。

「出て行けよ、おらー！」

「疫病神！ あんたなんかいるからっ！」

小さな子供に対して言うには酷すぎる様々な罵倒を、石と共に投げつける村人たち。

それは、あまりにも酷い光景だ。

よく見ると石や罵倒を受けている少女は、以前ハ・ミルを出る際にお世話になった子だった。空中には印象に残りやすいぬいぐるみだったので、すぐに分かった。

そのぬいぐるみが止めてと叫ぶが、それでも止まることはない。

「はあ」

俺は思わず溜息を吐く。それを見た途端、誰よりも早くジュードが駆け出し、石を投げていた一人の腕を掴んだからだ。あいつらしい。

「お前たちのせいだ……」っちは散々な目じゃー！」

視線を直せば、ジュードたちのもとへ村長が詰め寄っていた。ミラとアルヴィンは俺が溜息をしている間に、前へ出ていた。

にしてもあの婆さん、対応が違い過ぎる。話を聞くと、ラ・シュガル兵に何かされたらしい。怪我をしている村人が数人、地面に座って手当をしている。ミラたちを追っていた兵士だろっ。

「よそ者に関わるとロクなことにならん！　すぐに出て行け！」

というのも村長の言葉。そう言い切ってから、こちらが何か言う前にどこかへ行ってしまった。まあ家だと思っが。

例の少女も、恐らく家があるだろう方向へ走り出した。

「取り敢えず、俺は怪我人の応急処置をしようと思っが……身体だけじゃなく、心を助けるのも医者の仕事だと思っよ、医学生？」

少しソワソワしているジュードに、俺はそう話しかける。

「では私たちは村の者から、ラ・シュガル軍の動向を聞くとしよう。長く留まるつもりはない。それを忘れるな」

「うん。わかってる。ありがとう、2人とも」

その言葉で、俺は地面で休んでるのか倒れてるのか分からない人たちの所へ。ジュードは少女が向かった方へ。ミラは村長の家へ行き、アルヴィンはミラについて行った。

手当をしながら話を聞くと、前々からこの村には何故かラ・シュガル兵いた。そしてそれは、先程まで攻撃されていた少女が村にいるせいらしい。だからよその者を追い出そうとするのだとか。

そしてここにいた兵士は、あのジャオが追っ払った。そしてあの少女はジャオが連れてきた子で、それ以来不幸なことが起きる。だから迫害された、と。

……こういうの格好悪いとは思っけど、辺境の小さな村としてはしょうがないのかね？

その数分後、俺は村の外にいた。つまりはイラート街道にいる。ミラたちには、道中の魔物を先に倒しておくと言っている。実際にその通りだし、裏で何か考えている、なんてこともない。ただジュードがこれからあの少女をどうするのか、原作を思い出さずとも、性格からしてどうなるのかが分かりきっているからだ。

それにしても……

「魔物の数、多すぎだろ！」

昔一度だけ見た戦争ではもっと多くの人間の群れだったが、それはそれ、これはこれ。

どうせ皆が来ても戦わされる訳だから、見える分だけは倒しておく。

「」

精霊術を詠唱しながら、地形が変化しないように威力と位置を定めるが、これが難しい。俺はマナのコントロールが良い訳じゃないから、慎重に調整して……放つ。

「」

普段なら絶対に使わないが、誰も見ていないから容赦なく使う闇属性の上級精霊術。

ちよおおおおとだけ調整に失敗して、魔物どころか樹木が何本か消えたが……これくらいなら誰かにばれる心配もないだろう。

「ゼニス！ 巨大なマナを感じたが一体なんだ!？」

前言撤回。木ではなく術のせいでマクスウエル嬢にばれました。

「ゼニス、どうかしたの？」

「あー、んー、魔物が結構いたから、精霊術ぶっ放しただけだよ」

ジュードの言葉にそう返すと、驚きの表情になるミラ。

「あれだけのマナを、君が？」

「マナの量なら自信があるんでね。ま、今のですっからかんだけど」

そう言いつつ、ミラが何かを考えるような素振りを見せる。

「……………ふむ。どうやら私は、想像以上に心強い護衛を得たようだ。改めて、これからもよろしくたのむ。エリーゼのことでジュードを煽ったことを前払いとして、これからは本気を出してほしい。いいな？
元傭兵」

「そうなると面倒だから実力隠してたのに、本末転倒だ……というかエリーゼって？」

予想は簡単だが、恒例の知らない振り。

そして俺の前に出てくる、ぬいぐるみを持った女の子。

「あ、エリーゼ、です」

「僕はティポだよー！ よろしくねー！」

「ああ、聞いたかもしれないが、ゼニスだ。よろしく」

「えっと……よろしく、お願いします」

「わーい！ また友達が増えたー！」

先程ジュードが追った女の子、エリーゼ。本名はエリーゼ・ルタス。ジュードが護るといふ条件で、ミラはエリーゼを連れて行く許可を出した。

やはりジュードが連れて行きたがったらしい。

「ティポのこと、驚かないんだね」

「いや驚いたけどさ、マクスウェルを見た後じゃ、そこまで驚きはしないな」

「ああ、成程……」

おっと、ジュードとの会話で思い出した。

「つーかミラ嬢、エリーゼのことでジュードを煽ったって、そっちも許可出す的なこと言っていなかった？」

「だが、最初に言ったのは君だ。違うか？」

「はい、そうです。すみません」

「論破されんの早いなオイ」

うるせえぞアルヴィン。だって正論なんだから。しかも責めるよくな言い方じゃなくて、事実を言っているだけ、という言い方だから反論しにくい。

「そんなじゃ、行くとしますか。どっかの誰かさんが綺麗に掃除してくれたから、しばらくは楽でいいぜ」

「俺は心身共に疲れる羽目になったわけだが」

「それは自業自得でしょ」

いやまあその通りなんだけどね。ほらあれだよ、俺は一応さ、イル・ファンでは有名になってきた医者な訳よ、医者。命を敬う仕事をしている訳で、そうなるって簡単に人の命を奪うというのは……ねえ？

そう言った結果がコレ

「では人とは戦わなくていい。その代わりに魔物と戦ってくれ」

「畏まりました、お嬢」

「弱っ……」

マクスウェルのくそつたね。そしてアルヴィンっつせえ。

だがそれなら俺にも考えがある。人間が相手ならマジで戦わないからな？ フハハ。

「だけど俺だけが戦ってちゃ、お前らが強くないからな……少しは残すぞ？」

「そうだな、そうしてくれ。少しでも力を付けたいのにな」

「だったら全部自分で戦うのが一番だと思うんだが……まあ速い方が何より、か」

「うむ、そういふことだ」

「りょーかい」

ちなみにこの会話、アルヴィンの、『そんなじゃ、行くとしますか。』からずっと歩きながら続けている。魔物と会わないから、話が途中で止まらない。

戦うよりは話す方がずっと良いが、さっきから言い負けているので、さっさと止めたいのが心情です。

「……」

ふと気になって後ろを向くと、何かを考えているような仕草をしているジュード。

「どうかしたのか？」

「え？ ううん、ちょっとした考え事」

「そんなら見りゃ分かる。悩みなら相談しろよ？」

「あはは、ありがとう」

「気にすんな。二・アケリアで言ったろ？ 子供は大人に少しは甘えろって」

「あ……うん。考えがまとまりそうだから、そうだったら、もしかしたら相談するかもしれない」

「オッケー」

うっん。俺もジュードのこと、お人好しなんて言えないな、これは。

「ゼニス。君はジュードのことを、かなり気に掛けているのだな」

ふと、ミラに話し掛けられる。

「今言った通り、あいつが子供だからってのもあるが……ちょっとした理由があってね」

「ん？ つまりどつという事だ？」

深く聞いてきているわけじゃないが、聞かれてもその理由は話せない。

「悪いがその先は秘密だ。依頼者に話すほどでもないし」

「ふむ……もしかして、君は同性が好きだという種類の人間か？」

「は？ ちょっと待て。そんな知識どこから持ってきた。そしてそれの答は違う、だ」

「かつてイバルが持っていた本に、そういった内容の物があったのだが……もしそうならば応援するぞ？」

「……………イイイイバアアアルウウウウ!! それに違うって言っただろー!」

見たことはあるが会ったことのない奴の名を叫ぶ、なんて生まれて初めてのことだが、これが叫ばずにいられるか！ あいつはそんなものにまで興味があるのか!?

「確か本の題名は……『性の趣向』、だったか」

「そんな本をマクスウェルが読むな！」

「だが人間の事を知るには、書物が一番だろう？ 特に性の問題は分かりにくいし、何故か性の事に関しては誰も答えてくれないから本を見るしかない」

「ああくそっ！ 間違ってるはずなのにその通り過ぎて言い返せない」

とりあえず、俺の誤解を解くことには成功した。時間が掛かったが。

そして、一般的な性に関して知る正しい本があるという事を教えることにも成功した。かなり時間が掛かったが。

俺達の話聞いてかなり引いていたアルヴィンとジュードの誤解を解くことにも、なんとか成功した。一番時間が掛かったが。

あとそのストレスで、いくつかの木がストレス発散という名目で伐採された事を、ここに記しておく。

第九話 サマングン街道にて

ハ・ミルの村から街道を通過して、俺達はイラート海停へ戻りついた。道中に出てきた、多数の魔物は見つける度に俺が倒した。岩陰や木陰から出てくれば、その回数だけ刃を振るった。

「ふ〜。ストレス発散終了できて満足っ」と

運も良く、行く予定だったサマングン海停行き船があったので、すぐさま乗り込む。

他の海停行きは封鎖令があったらしく、どちらにせよ海路ではイル・ファンに行けなかったようだ。

休むくらいなら、船に乗ってからでも問題ない。疲れている顔も見えないが、まあ大丈夫だろ。その内の一人は海を見て感動してるようだし。

その『感動してる』のは言うまでもなく、エリーゼだ。海を見たのが初めてらしく、目を爛々と輝かせている。

「なあジュード。あの娘、監禁でもされてたのか？」

「その逆で、匿われてたって可能性もあるな」

「うん、僕もゼニスと同じことを思ってた」

アルヴィンの言葉に俺が付け加え、ジュードが答える。

俺達がそんな話していると、エリーゼの悲鳴が突如聞こえた。何かあったのかと思って振り返ると、大したこともなく、元気にティポと

お喋りをしていた。海を見て興奮しているのだろつ。

「でも、悪い子じゃないよ」

「そうみたいだな」

「あれが良い子を演じてるのだとしたら、大した演技力だ。世界中のスパイは涙目だな」

ジュードの言葉に、アルヴィンと俺が肯定する。

「で、ジュード。引き取り手に目星はあるのか？」

「ううん、まだ。良い人が見つければいいんだけど……」

「そうか……なら、一つ考えがある。サマングン海停に着いたら、その先にあるサマングン街道を渡ろう。少し遠くてエリーゼにはキツイかもしれないが、サマングン街道を抜ければカラハ・シャルルって町がある。そこで探してみたらどうだ？」

悩むジュードに、一つの提案を出す。

とはいえ最寄りの町はカラハ・シャルルしかないんだけどな。

「分かった。じゃあ、そうしてみる。ありがとう」

俺の提案を聞いて、礼を言ってくるジュード。どういたしまして、と返してこの話は終わった。

それからミラがエリーゼに、『何故このぬいぐるみは動いている？』と至極もつともな事を聞いていたが、結局答えが出ることは無かった。

分かったのは、ぬいぐるみ……つまりティポはエリーゼの友達だという、既に知っている事だけだった。

そしてやつとの事で到着した、サマンガン海停。

カラハ・シャルルに行くためにはサマンガン街道を通る必要がある。だが、今の俺達にとって第一に必要なのは、休息だ。船の中で休めたとはいえ、アレはアレで体力を消耗する。日も暮れそうだし、港に着いたら宿屋に行こうと前もって決めていた。

「……っ！ ……っ！」

「ゼニス、何してるの？」

そう、決めていた。過去形なのだ。

「いや、あのな？ 宿に泊まるのっ、今日は……くっくっ、止めとこっ……くっく」

「ゼニス？」

「おいおい、どうしたんだよ？」

言葉が途切れ途切れになり、時折笑い声が漏れる俺を心配したのか、男2人が寄ってくる。

俺は目の前のソレを素早く取って、見つからないように懐にしまっ。

「ふう、悪い。やっと落ち着けた。理由は後で説明するから、今日は街道で野宿だ」

「え？ でも……」

「エリーゼ、喜べ。今日はキャンプだ」

「キャンプ、ですか？」

「やったー！ キャンプなんて初めてー！」

ジュードはエリーゼの事が心配で口を出そうとしたのだろう。だがそれは、俺が先にエリーゼに言った事で、口をはさめなくなった。

「……何か、考えがあつてのことか？」

「ああ、ここは人が多い。街道で全部話す」

真面目な顔で言えば、ミラは頷いた。アルヴィンも分かっていないようだが、それでも俺の意見を聞くことを優先したのか奥へ向かい、エリーゼも続く。ジュードは納得してないようだったが、俺の後ろをついてきた。

「さて、では何故泊まるのは止めようと言つたのだ？」

海停から出てしばらく、人がいない場所まで歩いてから、ミラが聞いてきた。

エリーゼはアルヴィンと一緒に、キャンプの準備をしている。派手な事はできないが、それっぽくできるようにアルヴィンに頼んだのだ。

ジュードはミラと一緒に聞いている。

「簡単なことだ。ミラ嬢にジュード、お前ら指名手配されてる。手配

書も港にあった。このまま泊まれば、通報されて捕まったかもしれない。だからだ」

「指名手配、だと？」

俺は頷いて、手配書を出して説明しようとする。

「……………」

が、

「……………っ！ くくく……………」

「……………ん？ ゼニス、どうした？」

手配書の絵を見て、港で我慢していたものが噴き出した。

「……………くっくっ…アッハッハッハッハッ!!!!」

手配書を思わず地面に叩き付けて、大声で笑ってしまふ。

俺が叩き付けた手配書は裏返しになっており、肝心なところが見えなくなっているため、ジュードはそれを2枚とも拾い上げる。

「……………え？」

そして、微妙な顔になった。

ミラも後ろから覗き込み、

「これは……………私、か……………？」

開いた口が塞がらなくなった。

ちなみに俺はというと、腹を抱えて地面に転がり、ゲラゲラと爆笑している。

手配書には、確かに指名手配犯の絵が描かれている。ただし、その絵は非常に下手だ。

ミラはその特徴的な髪の毛のおかげ(?)で、まあ分かる。という具合。

これがミラだと言われれば、納得できなくても理解はできるだろう。幼稚園児並みに下手だが。

だが問題はジュードだ。これでは黒髪の男ということしか分からない。そもそもこれは人間なのか、というレベルだ。というか何で二人とも横顔で描かれてるんだ？

見つからないに越したことはないので、手配される側としては気にならないだろう。

それでも念の為に、宿に泊まらない方が良かったのだ。

しかしこれは、人によっては精神的に来るかもしれない。『俺はあんな感じなのか……』という風に。実際に、ジュードは気にしてないようだ。ミラは慌てている。『私はこの絵のように魅力がないのか』と。それを直接聞かれているジュードは顔が真っ赤。それを見て更に笑う俺。

「とりあえず、おたくはそろそろ笑いの止めたら？」

「はあ、はあ……無理。もうちょい待って……ぶっはは……」

「気持ちは分かるが、いつまで笑ってるんだっつーの。エリーゼ姫は……」

「楽しみ……です……」

「おっ友っ達〜 おっ友っ達〜」

「……はあ」

息切れするほどに笑った俺、呆れるアルヴィン、真っ赤になっているジュード、初心な少年に詰め寄って己の魅力について真剣に聞くミラ、初めての友達との初めてのお泊りがキャンプということでのテンションの高いエリーゼとティポ。

現状を一言で表すなら、カオスだった。

……とまあそんなことがあった訳だが、今はその翌日。

キャンプでの材料はそこの木と、俺が買っていた旅の一式。食材も海停に売っていたし、木の実とかもあったので困らなかった。特に変なことも起こらなかったため、野宿としては良かったはずだ。

寝るときは男女別のテントを張って、周辺にホーリーボトルを撒いた。万が一人や獣が近づいてきても、俺やアルヴィンが気配で察することができるから問題なかったからだ。

まあ実際は何も近づいてこなかったから、一応は眠れた方だと思う。

んで、朝になったので再びカラハ・シャルルへ向かう。

昨日の内に応急処置の道具などは買っておいたので、そのまま街道を渡る。このまま行けば、あと数十分という所で町に着く……はずだった。

「あーらら、検問だ」

俺らが進む道の先に、ラ・シュガル軍による検問が行われていた。いくらあんな絵だとはいえ、ミラの絵は特徴を掴んでいたので、捕まる可能性もゼロじゃない。そう、限りなくゼロに近いけど、ゼロではない。

「こうなると、こうちを進むしかない……か」

「「こうち」とは？」

「サマングン樹海。エリーゼには厳しいかもしれないが、あそこをうまく抜けることが出来れば、カラハ・シャールに行けるはずだ」

俺の呟きに反応したミラに、そう答える。

樹海なんて、一般人であっても非常に危険な場所だ。子供にとっては厳しいどころではなく、危険という言葉が適任だろうが、しっかりと見ていれば問題ないだろう。

「ならば、迷う必要はないな」

検問がある方向とは逆の道に、ミラは言葉通りに迷いなく進んだ。だが、そこに待ったを掛けるやつがいた。ジュードだ。

「エリーゼには厳しいんでしょ？ なら、手配されてないゼニスかアルヴィンと一緒に検問を通った方が安全だし、問題ないんじゃない？」

なるほど、エリーゼは俺かアルヴィンが連れて行く、と。そうすりゃ確かに安全だな。

だが残念。それは無理だ。

「ジュード、君に二つ質問だ。俺とアルヴィンの雇い主、及び依頼内容は？」

「え？ 雇い主はミラで、内容はミラの護衛……かな？」

「うん、まあそうだな。つまりだ、ジュード。俺達が護る対象はミラ嬢であって、エリーゼじゃあないんだよ」

「な!? でもそれじゃー!」

「何か言われる前に言わせてもらおうが、これで俺がエリーゼの事を任されたとする。更にその間に、ミラ嬢が魔物に倒された。こうなったら俺はどつすりゃいい？」

敢えて『魔物』の部分は強調する。

……だって人とは戦わなくてもいいって言われてるもんね。

「それは……」

「こっちは結構適当にやってるよつに見えるだろうが、最低限はこなしている。受けた仕事には、責任を持たなければならぬ。それが大人だ」

「……」

「画面の前のみんな。『最低限』って所には突っ込むなよ、頼むから。それともう一つ。」

「ア・ジュールの仕事を放っているお前が『仕事の責任』とかワロス、とかも止めてくれ。」

「あの……わたしなら大丈夫……です、だから……」

「ケンカしないでー！ 2人は友達でしょー!？」

言い方は違えど、エリーゼとティポが喧嘩は止めて欲しいと言ってきた。

あれ、本来ならこれってミラが言われてたような……気にしたら負けだな。

「……エリーゼもそう言ってるし、ミラ嬢は行きそうだしな。俺らも行くぞ」

「……うん」

納得できてないのか、俯いたままのジュード。

それを見て、俺は溜息を吐いた。

第十話 危機なる樹海

ティポ曰く『ジュードとの喧嘩』から、数分が経った今。俺達は樹海の中を、警戒しながら進んでいた。この樹海に入った直後、狼の魔物から歓迎を受けたからだ。

襲われたわけではないが、狼の群れの全員がこちらをじっと凝視してくるのは、気分の良いものではない。見極めのつもりか、それとも来るなという警告か、ただの観察か。最後のは違うとして、そのあたりが妥当だろう。

ふと、上空から魔物の気配を感じた。しかもそこは……

「っー」

ジュードの、真上！

「ジュードオッ!!」

「な……がっ、は……」

おそらくは「なに？」と言おうとしたのだろうが、それよりも先に俺の武器、つまり鎌の刃ではない部分で、腹を殴打した。攻撃目的ではなく、回避させるために。

「何をしている…ゼニ……ス……」

一瞬だけミラが非難の声を荒げたが、その直後に降ってきた物体を

見て、口を閉ざした。

落ちてきたのは、人間よりも大きな　キジル海漠で戦ったグレーターデモツシュよりは流石に小さい　木の、トレント系の魔物だ。俺が殴打したせいでジュードが痛そうにしているが、あのままでは、その程度では済まなかったはずだ。

決して広くはないこんな場所で戦うのはよろしくない。

横に大きい木から枝のように腕と手が生えている、そんな一目見ただけで攻撃範囲の広いことが分かるこいつと、大鎌であるが故に同じく攻撃範囲が広い俺。

相手は腕と手だから関節があるので、狭い場所でも充分に攻撃を仕掛けることが可能だ。だが、俺は大振りすることができない。ここは樹海。周囲に生えている無数の木が邪魔で、振るえないのだ。

よって必然的に、有利なのはこの魔物……シルヴァトレントになる。いやまあ、本気になれば素手でも倒せるだろうが。

先程俺のせいでジュードは軽い怪我をってしまったようだが、治癒功で応急処置は済んでいたようである。しかし。

「エリーゼ、来ちゃダメだ！……っッ！」

エリーゼを庇い、枝のような腕の一撃をまともに受けてしまった。

「ジュード……」

「お、おいミラ嬢……」

武器が大き過ぎる俺とは違って動きやすいミラが、ジュードを見るために後退してしまった。アルヴィンは俺と同じ理由で大剣が使えないので、銃弾を撃って応戦しているものの、大したダメージは与え

られていない。

「うっうっ……」

泣きながらなのか、気弱な声を出しながらエリーゼが近づき……地面にサークルを描いた。

それは、範囲回復型の精霊術、ピクシーサークル。サークル系の回復型精霊術の中では一番下ではあるものの、12歳という年齢でこの精霊術を使えるというのは、驚愕ものだ。

エリーゼのお蔭でジュードが回復したので、ミラと共に前に出てくる。そこで俺は指示を出した。

「お前ら、アルヴィンもだが、もう一度下がれ。一気に片づける」

「なに？ 大丈夫なのか？」

ミラの質問に、俺は頷くことで答えた。

みんなが疑問を覚えながらも下がったのを見計らい、俺も後退し、武器を振るうことが出来る場所まで下がった。

「魔神剣……」

そして、放つのは俺のオリジナル技。

「鋭牙ー」

魔神剣・鋭牙。

もちろんただの魔神剣じゃない。通常の魔神剣よりも大きく、威力も格段に違う。

三日月を縦にしたような斬撃が一直線に進み、シルヴァトレントに

命中して 両断した。

「ほい、いっちょあがり」

振り向くと、三者三様に驚いていた。大型の武器を使い、魔神剣を使えるアルヴィンの驚きようが特に大きい様子。

「俺の魔神剣とは別格の強さだな……おたく、何で国に仕えないわけ？ こんだけ強けりゃ、出世なんて簡単だろうに」

「ぶっちゃけ、偉そうな無能に命令されたくないんだよ。世襲とかでそんな貴族も多いだろ？ 命令するのは好きだけど。まあ、だから兵士とか騎士つてのは、俺の就職候補にすら絶対にならないね。傭兵を止めたのも、実はそれ関係だったりする。ア・ジュールだと身分関係なく上に昇れるって噂だが……どうだかねえ」

「あー、そういつととか……なるほど、納得だ」

特に後半が嘘だらけの俺の言葉に思い当たる節があるのか、うんうんと頷くアルヴィン。

その横でジュードがエリーゼに、回復したことにしてお礼を言っていた。

だがよく見ると、エリーゼは俯いて泣いていた。ジュードが、もう魔物はいないから大丈夫だよ、と安心させていたが、この娘が泣いていたのはその事ではなかった。

「うっん、ちがっの……」

「ジュード君とゼニス君、もっと仲良くしてよー」

「その、邪魔にならないように、頑張るから……だから……」

なんかこの謎生物……生物？ に、初めて名前を呼ばれた気がする。

……って、俺？

「俺とジュードの仲、悪くなってるように見えただか？」

「だって、だって……」

「エリーのこと話してから、全然喋ってないじゃん」

んー、そう言えば俺達、樹海に入ってから一言も互いに言葉を交わしてなかったな。

どうやらそれを、エリーゼを連れて行くことを俺が怒って会話していないのだと、勘違いしてしまったようだ。

原作のミラみたいに、邪魔だなんて一回も言っていないし、思っていないんだけどな……。

「ゼニス……」

声のした方を向けば、そこには護衛の依頼主。

「今見た通り、エリーゼがいれば回復も楽になるだろう。それに私は、エリーゼがいても気にしない。それに免じて、許してやったらどうだ？」

「そうそう。このままじゃ、ちょっと大人げないんじゃないのかなあ」

……え、何ですかこのアウェー感。俺ってば何か悪い事したか？
もしか言ったか？

それにこれは本来ならミラの役目じゃなかったか？ 釈然としないな……。

「あー、すまん、ジュードにエリーゼ。俺が悪かった」

でもここは頭を下げる。いつしないと、いつまで経っても進まない気がしたから。

そして笑顔になったジュードとエリーゼ。それを見たティポが、

「そーそー。友達はニコニコ楽しくしなきゃねー！」

と締めくくった。

さて、その話は置いて、さっさと次に行こう。実は俺はこの樹海に入ってから、ある1つの事をずっと実践していた。

それは……高台から降りる場所は、必ず皆が降り終わってから俺が降りる。というものだ。

何故なのか。

覚えている原作の中で、これは嫌だなと思った内の1つが、ここにあるからだ

パスン

俺の目の前で先に降りたジュード達が着地した瞬間、そんな変な音が下から聞こえた。俺はこれの被害に遭いたくないから、後ろで待機していたのだ。

「えい………いっしょ、いっしょ、どいですか？」

「勘弁してくれ……………」の煙はなんだ？」

下を見れば地面から煙のようなものが巻き上がり、ジュード達はケホケホと咳をしながら、その中から出てきた。

「彼らは犠牲になったのだ……………ってか？」

ジュード達は着地した時に、少なからずショックを与えると催涙性の胞子を撒き散らす、ケムリダケというキノコを踏んでしまったのだ。

毒ではないが、タマネギを切ると涙が出てくるから切りたくない、と思ったことはないか？ 俺はある。それと同じような感じだから、踏みたくなかった。

これを避けられたことは純粹に嬉しい。ただ……

「……………」僕がサイキョーだねー！」

宙に浮いているために胞子の影響を受けない。と調子に乗っている（……………）のか？（ティポと、

「まったく……………ゼニス、人間以外なら私を守るのではなかったのか？ 守れてないぞ」

「……………」ミラ嬢、それはさすがに無理ってもんだ」

自称精霊王の無茶振りには、少し内で心イラッとした。でも人間相手には戦わないってのを覚えてくれてて、ちよいと感心したよ。

それからキノコを踏まないように、気を付けながら進んでいた。

今までよりも時間を掛けながら、しかし慎重に進んでいけば、樹界の出口が見えてきた。しかしそこには番犬の如く、樹界の入口で見かけた複数の狼の魔物……シルヴァウルフが、道を塞いでいた。更に、その後ろからは巨漢が歩いてきた。

「あんたは……」

「おっきいおじさん……」

エリーゼを保護していた、そしてガイアスの誇る四象刃^{フォーエブ}の1人。ジャオだ。

「おおおう、よう知らせてくれたわ」

「……相変わらず、魔物との交流が深い奴だ」

「やはり、あれはそうなのか……まさか、イバルの他に魔物と対話できるものが居ようとはな」

シルヴァウルフの頭を撫でながら礼を言っているジャオに懐かしんでいると、ミラもまた驚いている様子だ。というかア・ジュールに行けば結構いるぞ、魔物使いは。

「ハ・ミルの人たちに聞きました。ジャオさん、ですよね？」

「あれ、あいつの名前知ってたのか？」

「ああ、どっかの誰かさんは教えてくれなさそうだったしな。そんで、だ。どんな御用で？」

「いやいや、物事を勝手に決めつけるのは良くないよ？ 聞けば教え

たよ、それくらいは。

「知れたこと。さあ娘っ子、村へと帰ろう。少し目を離している間に、まさか村を出ているとはのう。心配したぞ」

心底心配していたらしく、親が子を叱るような、しかし優しげな表情と声で、ジャオはエリーゼに手を差し出す。

だがそれに対するエリーゼの反応は、拒絶だった。ジャオは複雑そうに表情を歪める。

「なあジャオ、何故この娘をあんな場所に軟禁していた？ ……いやそれ以前に、お前とエリーゼの関係は？」

原作のこんな詳しい設定までは覚えてないので、俺はそう聞いてみた。

「二つ目についてはゼニス、すまぬが今は答えられぬ。二つ目じゃが敢えて言うならば、俺は娘っ子が以前いた場所を……生まれ育った故郷を知っておる」

「ならエリーゼを返せば、彼女を故郷に連れて行ってくれるんですか？」

俺とジャオの会話にジュードが割り込む。それに対してジャオは、俯いて無言を貫いた。

「また、ハ・ミルに閉じ込めるつもり？」

「お前達には関係ないわい！ さあ、その子を渡してもらおうっ！」

ジュードの責めるような言葉に、ジャオの口調が荒くなる。ジュードはそんなジャオに恐れることはなく、守るよつにエリーゼの前へ手を翳した。

そんな空気の中、俺に小声で話し掛けてくる者がいた。ミラだ。

「……ゼニス。私は君に、『人とは戦わなくていい』と前に言ったな？」

「ああ、さっきも言ったが、ちゃんと覚えてたんだな。何だ、撤回してくれってか？」

「いや、撤回する気などない。ただ、このままではジャオと戦闘になるだろう。その際、樹海の魔物が私達を攻撃しないようにしてもらいたい。この狭い樹海で、あのような大男と戦っている最中に小回りの利くような輩の相手を同時にするほど、今の私は強くない」

そう、これはゲームじゃない。戦闘中に血の匂いを嗅ぎつけた肉食の魔物が襲いかかって来るなんてのは日常茶飯事だ。しかもこれは俺が悪いのかもしれないが、移動中に出てきた魔物の殆どが、俺によって駆逐されている。傭兵のアルヴィンはともかく、ジュードとミラは圧倒的に経験が足りてない。

そんな彼女らがジャオ1人と戦うだけですらヤバいのには、それに加えて複数の魔物を相手取るというのは……無謀どころか、無理だ。

「へえ。自分の今の限界を判断でき、しかもそれを理由に自分の言葉を覆すこともない、か。客としては最高だね」

傭兵業やってるとたまにいるんだよね、己の力を過信して特攻して、ピンチになるとすぐに『早く助ける』とかいう奴。それだけなら全然文句ないんだけど、そう言う奴に限って契約時に『全部俺だけで

出来るから手を出すな』とか言ってるんだよなあ。傭兵の仕事が減らして出来るだけ払った給料を戻させるために。

……主に貴族の坊ちゃんとかが。

その点、ミラのよくな客は嬉しい。俺の中でミラへの好感度がアップしました。やったね

「なにやら悪寒までしてきたな……それではゼニス、頼んだぞ」

「……やる気なくなった」

俺の『やる気なくなった』発言は誰かに突っ込まれることもなく、というか誰も聞いてないのかもしれないが、とにかくそれから数分が経った。依然として、彼らは戦い続けている。

ジャオは大振りにハンマーを振るうので攻撃力は四象刃の中で最高なのだが、いかせんウインガルが得意とするような速さが無い。だから何人かで速さを使って翻弄すれば、普通ならば勝てるだろう。そう、普通なら。だが相手はジャオ。普通ではない。

それくらいで敗れるのならば、四象刃は名乗れない。その欠点を補えるからこそ、ジャオは四象刃であるのだ。

「ぬう、小癩な！ 魔王地顎陣！」

あの巨体から発せられるパワーの全てを、地面に叩きつける。

これ以上ないほどに単純な行動だが、それによってジャオの周囲の大地が噴出した。

「ぐっ……っ！」

「があっ！」

今まさしく、共鳴^{リソク}して翻弄^{リソク}していたミラとアルヴィンが吹き飛ばされる。二人とも運が良かったのか、吹き飛ばされた先に木々は無く、衝突して背中に傷を増やすという事も無かった。

スピド勝負ならジュードが最適だと思っていたので、翻弄する役目はジュードがするのかと思っていたのだが、予想が外れたようだ。血を流す獲物を狙う魔物の首を斬り落とし、これで何匹目かと呆れながらも、思わずジュードがどこにいるのかと探した。

そして、見つけた。いつの間にかジャオの真後ろに移動していたのだ。

とても不思議な構えをしているが、アレを俺は見たことがある。手と手の間に風属性のmanaを込め、敵とすれ違う際にmanaを解放することで敵を巻き上げる武身技。

「巻空旋！」

「ぐっ……」

ジュードの手から放たれたソレは、まるで小さな竜巻となり、俺が知る限り最大の巨軀を誇る身体が、宙に浮かんだ。

「ミラ……」

「ああ……」

そしてその間に行動していたエリーゼのお蔭で、動けるようになって

たらしいミラは素早く移動してジュードと共鳴し、共鳴術技を放つ。

「絶風刃！」

彼らが最初に覚えた、絶風刃。交差された風の刃は、地面に落ち、立ち上がったばかりのジャオに避けられるわけは無く、命中した。

想像以上の結果に、思わず軽く笑ってしまう。今のあいつ等では厳しいと思っていたのだが、彼らの状態はまだ互いに息が荒いくらいだ。怪我也、軽いものくらいしかない。

……だがここで、ふと敵意を含んだ視線を感じた。俺の背後から、俺を見ている。後ろを見ても、そこにあるのは巨木のみ。先ほど戦った、シルヴァトレントよりも大きいな木。

嫌な予感がした俺は、迷わず視線を上げる。そうしたら……。

その巨木と、目が合った。

「は？ ……がっ！」

木だと思っていた物体と目が合い、一瞬呆けてしまった俺の腹に、見事な一撃が繰り出された。

そのまま弾かれたように、俺は飛んだ。あの巨木にぶん殴られた直後にそう錯覚してしまうほど、凄まじい威力の一撃だった。

俺は丁度ジャオとミラ達の中間に吹き飛ばされ、さっきとは逆に運が悪かったのか、背中と後頭部を壁に強打した。叩き付けられて響く音が、その威力を周囲に伝わせる。

「ゼニス！」

「ひっ……！ あ、うっ……」

俺の惨状を見て駆け寄ってくるジュードと、偶然近くにいた為に悲鳴を上げながらも精霊術を行使してくれるエリーゼ。

「痛つたいなあ……あ、サンキュ、二人とも」

「動いちゃだめだよ！ 頭から出血してるんだから！」

ジュードの医者らしい言葉に苦笑しながらも、俺は俺を襲った物体を再び視野に入れた。

そこにいたのは、さっきは暗くてよく見えなかったので分からなかったのだが、ここ周辺にある木やシルヴァトレントと比べると、配色が異なる巨木だった。トレント系魔物の、異常進化形態なのかもしれない。

バッチリとよく見た今では、その魔物が何なのか理解できた。アレは、以前キジル海瀑で戦ったグレーターデモッシュと同じ、ギガントモンスターだ。

その名は、パーガフォート。

普段は高台にいて降りてくることは稀なのだが、サマンガン樹界に生息している生物の中で、最も出会ってはいけない最悪の魔物だ。